

現代史の取り扱いについて（2）

—— 現代社会の視点から ——

地歴・公民科 高橋 健 司

1. はじめに一現代史を学ぶことの意味—

昨年度の研究紀要（第33・34集）に引き続いて、今年度も現代史の取り扱いについて考察を加えたい。

現在、現代史をめぐるのは活発な議論が行なわれているが、その中心となっているのは戦争中の出来事など歴史的過去の是非を問うことである。しかし、そこにはそれが生徒にとってどのような意味を持つのかという視点は、ほとんど見られない。生徒の現実には置かれている世界との関連性を考慮しない限り、生徒の日常からは遊離した議論に陥ってしまう。それゆえ現代史を単に歴史的過去としてのみ扱うのではなく、現代社会まで射程に入れた幅広い視野から扱っていく必要があると考える。

では実際に生徒にとって、現代史を学ぶ意味は何であろうか。そこでまず最初に、私のとらえている高校生像について触れたい。普段私が学校で目にする高校生は、過剰なほど「みんなとっしょ」であろうとする。女子生徒の服装を見ているだけでも、同一のメーカーの同色のマフラーを、同様の結び方で身に着けている生徒がクラス内に何人も存在する。ところが傍目には一見全く同じに見えるのだが、生徒の間ではそれが「カシミア入り」であるかないかで「大きな違い」があると感じており、そこに個性を表現できると考えている。彼らが集団から突出することを恐れながら、「許容できる」ほんのわずかの差に意味を見出し、こだわっている姿がうかがえる。これは単に流行という言葉では片付けられない何か不気味なものを感じる。

このような高校生に対して、授業の最初にアンケートを行なってみた。（資料1参照）私が担当している高校2年生の3クラス110名に対し、無記名で次のような二つの質問を行なった。まず最初の質問は、「同じクラス内でいじめを見ました。他の人たちは見て見ぬふりです。あなたならどうしますか？」というもので、3クラスとも回答の選択肢で最も多かったのが「何もしない」であった。最も多いクラスで76%もの生徒が、最も少ないクラスでも60%の生徒が傍観の立場をとると答えている。事前の調査では、ほとんどの生徒が「いじめは悪いこと」と考

えているにもかかわらずである。

そして二番目の質問は、「電車にお年寄りが乗ってきました。しかし誰も席を譲ろうとはしません。座っているあなたなら、どうしますか？」というもので、これも3クラスとも「どうするか迷う」と答えた生徒が最も多く、その割合は最も多いクラスでは62%、最も少ないクラスで49%にのぼる。さらにこれに二番目に多い回答の「座り続ける」と答えた生徒を加えると、どのクラスでも8割近い生徒が消極的な態度を示すことがわかった。これも事前に生徒に聞いた際には、「お年寄りには親切に」ということに対して、誰も異を唱えなかったにもかかわらずである。

このアンケート結果からもわかるように、高校生に見られる「意識と行動のずれ」は非常に大きい。そしてそれをもたらしているのは、個人の道徳的判断よりも「周囲の目」が彼らの行動を支配しているためであり、また「集団からの排除」を恐れて「みんなとっしょ」であろうとするためである。このような集団主義的で差異に対して非常に敏感、かつ排除されないように集団に同調しようとする生徒の日常を授業で問うとすれば、「ある事柄に対して、それが正しいか正しくないか」という問い掛けに意味があるとは思えない。マスコミ等でよく「子どもの倫理観の欠如」を耳にするが、少なくとも私の身近にいる高校生に関しては、「大人と同程度」の倫理観は持ち合わせている。むしろ問われるのは「周囲の目」が意味するものであり、「正しいと思っても、それができないのはなぜか」あるいは「正しくないと思っても、それに従ってしまうのはなぜか」という問い掛けが必要である。

そのような問い掛けを私は、過去の歴史の中に求めたいと考える。特に全体主義を経験した現代史こそ、格好の教材としてふさわしいのではないだろうか。暗黙のうちに集団主義に陥っている高校生の日常を顧みる一つの方法として、過去との対比が行なえるならば、そこに現代史を学ぶことの意味が見出せよう。そこで次に、授業において全体主義の時代を検証し、現在を顧みるために必要な教材化の視点について見たい。

2. 教材化の視点—日常史と社会心理学—

(1) 日常史の視点

私が最初に全体主義の時代の検証を思い立ったのは、1993年にアメリカのワシントンDCにオープンしたホロコースト記念博物館（UNITED STATES HOLOCAUST MEMORIAL MUSEUM）を訪れた際であった。同館の展示方法には、「ユダヤ人お断わり」の看板がかけられた商店や公園に置かれた「ユダヤ人専用」のベンチなど、第二次世界大戦前後のドイツの街角を復元し、見学者に追体験させようというものがあり、日常生活のごく身近な所に目を向けさせようとする視点に、深く考えさせられるところがあった。（資料2参照）

このような体験を元に、日常の視点から全体主義の時代を検証する教材化を図ろうとしたが、その枠組みとして用いたのが日常史の視点である。日常史の視点とは、主に近年のドイツ社会史研究の中に顕著に見られるもので、デートレフ・ポイカートらに代表される若い世代の歴史家たちがその中心である。

その特徴として、ナチズムを支えた「普通の人々」の日常を分析することによって、その時代の社会体制や精神状況を明らかにしていこうとする「下から」の視点に立ち、ナチズムをヒトラーやアウシュビッツの異常性や狂気の問題に限定せず、むしろごく平凡と見えるものの中から、アウシュビッツの道へとつながっていったものを導き出すことに重点を置いている。

そのために必要なものとして、ポイカートは次の三点を挙げている。それは、①生活世界の構造が複雑であることを理解する力、②焦点をしぼった分析的関心、③自分自身の現在の日常の問題意識と価値観を倫理的に見つめなおすこと、の三つである。⁽¹⁾

これは従来の「被害者＝反体制者・ユダヤ人」「加害者＝権力者・政治的指導者」という単純な図式では見えてこない、言わば「灰色の存在」である「普通の人々」を取り上げ、彼らの日常的な感覚でのナチズム理解の在り方や政治体制の受け入れ方を明らかにしていくことによって、ナチズムの今日的課題の把握を行なおうとするものである。

また、日本でナチズム研究を行なっている山本秀行も、「ユダヤ人迫害などが、ひと握りの狂気かられた人びとがやったことであるとするならば、問題はむしろ簡単であろう。われわれには関係ないこと、過去の出来事と

してすまうことができるからである。だが、人びとの証言や記憶の分析からいえることは、むしろごく平凡で、普通の人びとが、おおくのばあいナチズムとは距離をおきながらも、ナチスの政策を支持したり、ナチ体制に統合されていったという点にある。平凡な結論ではあるが、そこにこそナチズムの問題とこわさがあるように思われる。」⁽²⁾と述べているように、異常性や残虐性といった非日常の世界に問題を収束させることは、ナチズムの今日的課題の意味を失わせることになり、それゆえ日常世界における問題として取り扱う必要がある。

これに対して、ホロコーストという「異常」で「残虐」な出来事すらも、日常の視点でとらえるのが可能であることを見事に証明してみせたのが、1985年に制作されたクロード・ランズマン監督のドキュメンタリー映画「ショア」である。この映画の特筆すべき点は、のべ9時間半にわたって、ホロコースト関係者が40年前に起こったことを証言する映像のみから構成されるという手法にある。それもユダヤ人やナチス親衛隊員だけでなく、例えばユダヤ人の輸送に関わった国鉄の職員、機関車の運転士といった「普通の人々」を登場させ、彼らの語り口を通して、「非日常の仕事に従事した彼らが、「いかに日常を装うことに努めようとしたか」を浮かび上がらせている。⁽³⁾

こうした日常史の立場からのナチズム研究の層の厚さに対し、同時代の日本の社会史研究は、まだまだ開拓の余地がある。建前と本音の乖離といった我々には馴染みの深い日常感覚での歴史理解を、外国史研究に教わる所が多いのも不思議な観がある。「侵略」や「天皇」にばかり目が向くあまり、「普通の人々」には注意が払われてこなかったのであろうか。「軍隊」や「政府」「天皇」の責任を論じることのみに終始すれば、それが擁護の立場であろうと追求の立場であろうと、特異な非日常の問題として無意識のうちに問題の無化が進み、今日的な意味を失ってしまう恐れがある。

これに対して思想史研究の藤田省三は、「天皇制国家」と区別して「天皇制社会」という言葉を用いる必要を述べている。すなわち、国家を構成する人間とは全く違った普通の庶民が編成されて「天皇制社会」が作られ、その集権的権威の下でのみ、初めて「翼賛体制」という日本型全体主義が可能となったとし、全国津々浦々にまで及んだこの「翼賛体制」という一体的集団内における個人の行動様式に焦点を当てようとする。⁽⁴⁾こうした日本社会に対する「下から」の視点は注目に値する。

さらに作家・画家の妹尾河童は、戦時中に少年時代を

送った神戸の街の様子と自らの体験を克明に記録した『少年H』⁽⁵⁾を著してベストセラーとなったのは記憶に新しいが、この本によって「翼賛体制」の具体的な内容が広く知られるようになったのは画期的である。自伝小説という形をとってはいるが、歴史資料として十分に通用するものである。

このように日本ではまだ体系だった歴史研究には程遠いが、部分的にせよ日常の生活世界への関心が高まってきたのは確かである。また日常史という視点は、戦時中の極度の協同主義を照らすと共に、先に触れた我々自身の集団主義をも映し出してくれる可能性を持っている。「戦争は悲惨」という平板な認識で終わらせないためにも、「悲惨と知りつつ、それに異を唱えられなかったのはなぜか」あるいは「疑問を抱きながらも『当たり前のこと』として受け入れていたのはなぜか」といった、「普通の人々」の日常的行為・思考の実際を問い直していくことが必要である。

(2) 社会心理学の視点

日常史の視点から浮かび上がってくる、全体主義の今日的課題とは、突き詰めて考えると、人間の心性の問題といえるのではないだろうか。そこに現代史（過去）と現代社会（現在）とを結びつける手がかりがあるように思える。では、この心性の問題を社会心理学的に把握することは可能だろうか。そこで、次の二人の社会心理学者に注目したい。

まず第一に、フランクフルト学派のエーリッヒ・フロムは、急成長するナチズムを社会心理学的側面から分析して、1941年に『自由からの逃走』⁽⁶⁾を著した。この中でフロムは、当時のドイツの中産階級の分析をもとに「人間は個であることの不安が大きければ大きいほど強烈に類的結合を求める」という社会心理を唱えている。このフロムの説が、戦後50年以上たった現在でも説得力を持ち続けているのは、世界各地で今なお民族ナショナリズムや宗教結社など、多くの偏狭な集団が生み出されているためであり、それは不安・孤独を生み出す社会的背景の違いがあっても、集団や組織の持つ外的権威に依存して自己同一性を見出そうとする人間の心理が、未だに克服されていない、現代社会の問題であることを物語っている。

そして第二に、アメリカのスタンレー・ミルグラムは、権威に依存した人間の行為の問題点を明らかにするため、1963年にエール大学において、「アイヒマン実験」と称される一連の社会心理学実験を行なった。これは合法的権

威によって他人に危害を加えるように命令されたとき、人はどのように振る舞うかを調べたもので、実験結果は大多数の参加者（一般のアメリカ市民）がそれに従うことが判明した。

この実験によって「権威に対する盲目的服従」という点では、「上からの命令」でユダヤ人虐殺を行なったナチス親衛隊員アイヒマンと、「研究者の指示」に従って「残虐行為」を行なった一般のアメリカ市民との心理的な違いを見出すのは困難であるという結論が得られた。

この問題についてミルグラムは、1961年にエルサレムで行なわれたアイヒマン裁判について論じたハナ・アーレントの「悪の平凡さ」⁽⁷⁾という言葉を用いながら、次の二点に触れている。それは、①自分の仕事をしているだけで、特別な敵意を何ら持っていない普通の人が、恐るべき破壊活動の一翼を担い得る、②自分のやっていることの破壊的影響が明白となり、基本的道徳規範と矛盾する行為を遂行するように求められたときでも、権威に抵抗できる足場を持っている人は少数である、の二つである。⁽⁸⁾

このような問題点の指摘に対して、日本について見ると、どうであろうか。例えば、ドラマ「私は貝になりたい」の原作者で、自身も捕虜虐待の容疑で戦犯に問われて死刑判決を受けた（後に唯一人再審が認められ減刑となった）加藤哲太郎の手記を読むと、そこには命令と道徳的規範との葛藤に苦しみながらも、遂には権威に服従していく人間の心理が克明に述べられている。⁽⁹⁾

また、現在でも生々しい記憶を留めているサリン事件を引き起こしたオウム真理教について、元信者の高橋英利の手記『オウムからの帰還』⁽¹⁰⁾を読むと、ここでも「教祖への絶対帰依」という「権威への盲目的服従」に陥った信者の側からの痛切な反省が綴られている。

このような手記を目にするとき、アイヒマンに典型的に見られた権威と服従の問題が、時間と空間を越えて繰り返されてきたものであることがわかる。これもまた、未だ克服されていない現代社会の問題であるといえる。

そこで次に、このような視点を生かして教材化し、それを実際の授業でどのように展開できるか、について触れたい。

3. 授業展開の実際—授業「全体主義の中の日常」—

授業を行なったのは、高校2年生対象の4単位の現代社会の授業においてである。まず最初に授業目標として、「全体主義の時代を生きた『普通の人々』の日常を検証

し、特に集団・組織内の個人の心理まで掘り下げて見ることによって、現代社会における集団・組織と個人の在り方を考える」こととした。

そして授業のタイトルを「全体主義の中の日常」とし、日本とドイツ双方の社会を取り上げた。授業は大きく分けて5部構成になっている。それぞれの見出しと時間配分は次の通りである。

- ①戦時下日本の日常（5時間）
- ②軍隊組織の中の日常（3時間）
- ③ナチス体制下の日常（5時間）
- ④ホロコーストの中の日常（3時間）
- ⑤服従を求める人間の心理（3時間）

以下この順番に従って、内容を見ていくことにする。
(資料3参照)

(1) 戦時下日本の日常

第1時：【愛国イロハカルタと戦時下の街の風景】

まず導入として用いたのは、戦時中に作成された「愛国イロハカルタ」(資料4参照)である。これを実際に使って班ごとに遊んでみて、当時の雰囲気を経験すると共に、読み札と絵札の意味を考えた。⁽¹¹⁾これに加えて当時の街の風景写真(資料5参照)を提示し、防空訓練のバケツリレーや、出征する兵士の見送りの様子を知り、街角に掲げられた防諜や精神高揚のスローガン、パーマをかけた女性の通行禁止の札などの意味を考えた。

第2時～第4時：【少年Hの見た戦時下の日本】

そして次に取り上げたのが、妹尾河童著の『少年H』である。『少年H』は先に触れたように、著者自身の少年時代を送った戦時中の神戸の街が舞台で、Hというあだ名の、疑問に思ったことはすぐに聞かすにはられない好奇心の旺盛な主人公の少年と、洋服店の仕立て職人で後に消防士となった父、熱心なクリスチャンで隣組の班長を務める母、そして妹の一家四人に降りかかる様々な出来事を、少年の目を通して克明に描いている。

このうち、5つの場面を選んでプリントにして配布し、それを読み進めながら、主人公が次々と発する疑問の数々に注目し、発問として投げかけてみた。その主なものをまとめたのが次の表である。

プリント	主な発問
①アラヒトガミ	なぜ学校で誰も御真影を見てはい

学校や近所で見聞きする天皇に関する不思議について

けないのか。アラヒトガミ（現人神）とは何なのか。
なぜ教科書は古事記の話を、そのまま載せないのか。
なぜ「天皇陛下というても、御飯も食べるしウンコもする。普通の人間と同じや」と子供に言った近所のおじさんが逮捕されたのか。
不敬罪とは何か。
なぜ子供はみんな天皇の赤子になるのか。
なぜ上官の命令はみんな天皇陛下の命令になるのか。天皇はたくさん隊長がどんな命令を出しているか実際は知らないのに、変ではないのか。

②赤紙
(資料6参照)

召集令状に対する大人たちの本音と建前について

赤紙が来て喜んでた人を一人も見ることがないのに、なぜ新聞には反対のことが書いてあるのか。
近所の兄さんの家に赤紙を届けた郵便屋さんが、気の毒そうな顔をして「おめでとうございます」と言ったのはなぜか。
赤紙を受け取ったとき、誰も喜んでなどいなかったのに、壮行会の日に兄さんはなぜ反対のことを言ったのか。
なぜ赤紙をなぜ「めでたい」と思わなければならないのか。

③踏絵

クリスチャンに対する弾圧について

なぜ「スタルヒン」の名前が「須田博」に変わり、「ハンドル」が「運転円把」に変わったのか。
なぜクリスマスを自粛しなければならないのか。なぜキリスト教が弾圧を受けるのか。
なぜみんなと違う考えを持っていると思われたら、非国民、国賊と言われるのか。
非国民、国賊とは何か。なぜ酷い目に合わされるのか。
なぜ牧師が治安維持法違反で逮捕されたのか。

④隣組 隣組の協同精神 について	防空訓練とは何か。火叩き棒とは何か。 なぜ新聞は空襲の事実を書かないのか。 なぜ役に立たない防空訓練が必要なのか。
⑤スパイ 相互に監視された生活について	なぜ父がスパイ容疑で警察に連れていかれたのか。 誰が誰をスパイしているのか。 なぜ父はスパイ探しをやめるように言ったのか。

こうした発問を通して、天皇という権威の名のもとに集団に同調しないとみなされるもの、すなわち「異質なもの」が排除され、またそれを恐れて人々が一層同調して、戦争遂行という一つの方向に向かって集団全体がまとめられていく姿をとらえようとした。

第5時：【「裸の王様」と少年H】

最後に、『少年H』を通して浮かび上がった上記の問題点を理解する手助けとして、アンデルセン童話の「裸の王様」を取り上げた。少年Hと「聖戦を信じた」周囲の大人たちとの関係は、この物語に登場する少年と「着物が見えた」大人との関係に類似する。そこでこの二つを比較することによって、フィクションが現実化していく過程を、「周囲の目」や「常識」に注意して理解しようとした。

(2) 軍隊組織の中の日常

第1時：【ドラマ「私は貝になりたい」】

第1部では翼賛体制を支えた共同体を取り上げたのに対して、第2部では日本陸軍という、より厳格に権威に支配される組織内での、人間の心理と行動について見ようとした。

そこで最初に取り上げたのが、先に触れたTBSで放映されたドラマ「私は貝になりたい」(主演：所ジョージ)である。このVTRの映像を用いて、主人公の清水二等兵が「上官の命令は天皇の命令」という言葉に押し切られて捕虜殺害を行い、戦後になって戦犯として逮捕され、裁判で死刑判決に至るまでを見た。

第2時：【戦犯裁判をめぐる討論】

次にドラマの中で死刑判決が下されたことに対して、「主人公は有罪なのか無罪なのか」、また「自分が同じ状況に置かれたとしたらどうするか」、各自で意見をまとめた上で討論を行なった。この結果、生徒は有罪か無罪かについては、ほぼ半数に意見が分かれる一方で、同じ状況に置かれたなら自分も手を下してしまうという生徒が圧倒的に多かった。(資料7参照)

第3時：【原作者・加藤哲太郎の苦悩】

そして最後に、原作者の加藤哲太郎の手記(資料8参照)を読み、中国で無実を叫ぶ捕虜の処刑に立ち合ったときに、良心の呵責に悩まされながら、どうすることもできなかったこと、日本で米軍捕虜が公衆の面前で天皇を罵倒したときに、相手の主張の正しさを認めながら、暴力を加えてしまったことを知り、個人の道徳的判断と矛盾する行為に駆り立ててしまう、軍隊組織が持つ「権威」の意味を考えようとした。

(3) ナチス体制下の日常

第1時：【アンネの見たナチスの迫害】

第3部では、第1・2部の日本と同時代のドイツに舞台を移して、ドイツ社会の「普通の人々」について見ようとした。ナチスの迫害というと、すぐに大量虐殺をイメージしてしまうが、授業では大量虐殺にエスカレートしていく前に起こっていた、見落とされがちな日常的な風景の中の弾圧にまず目を向けた。

そこで最初に、アンネ・フランクが遺した『アンネの日記』⁽¹²⁾を取り上げ、彼女の文章から1940年からドイツの街で起こっていた、ユダヤ人に対する黄色い星印の着用、自転車の供出や交通機関の利用禁止、プールや映画館など娯楽施設への立ち入り禁止、買物時間や外出時間の制限という、日常生活の細部にまでわたる規制・弾圧の事実を知った。(資料9参照)

第2時～第4時：【ドイツ市民とナチスの迫害】

そして今度は、「同じ街で暮らしていたドイツ人は、身近なユダヤ人に対する弾圧に対して、どのように思っていたのか」という発問を行ない、一般のドイツ市民の立場から迫害について見ることにした。

そのために、「普通のドイツ人」の生活の記録として、アメリカの社会学者ミルトン・マイアーが、戦後間もないドイツで聞き取り調査を行なって著した『彼らは自由だと思っていた』⁽¹³⁾を取り上げ、その一部をプリントに

して読み進めた。(資料10参照)

この中でまず、クローネンベルクという調査を行なったドイツの小さな街の人々が、余暇活動の充実や仕事の保障など、ナチスの時代を「よい時代」であったと考えていて、ユダヤ人に対する弾圧が起きた時にも「街角のちょっとした騒ぎ」ぐらいにしか思わず、「大して気に留めなかった」という感覚だったことを知った。

次にその背景にあった、ユダヤ人や反体制者といった人々が街の共同体から「異質な存在」と思われていたことを知り、「異質なもの」が排除されても「気にならない」無関心が、徐々にエスカレートする迫害への無抵抗・無感覚へと続いていくことを考えた。

これに対し、かつてナチスに反対した経験を持つ教師に注目して取り上げ、彼が「なぜナチスに対して反対しなかったのか」という発問を行なって、この人物について見ていった。その結果、ユダヤ人を気の毒に思いながらも、自分が「異質な人間」とみなされないように、一生懸命他の人たちと同じように振る舞っていたことを知り、その根底にあった恐怖心について考えた。

これを通して第1部の日本と同様、「普通のドイツ人」の日常感覚の中にも、ユダヤ人など「異質なもの」が排除されることに対する無関心・無感覚がある一方で、集団内での孤立を恐れて同質な社会集団に同調しようとしていたことを理解した。

第5時：【心理学実験「あなたは孤立に耐えられるか」】

最後に、上記の問題を身近なものとして理解するために、アメリカの社会心理学者のアッシュ⁽¹⁴⁾が行なった実験を紹介した。これはある質問に対して、集団の中で何も知らされていない一人(被験者)を除いて全員がわざと誤った回答をするときに、被験者はどんな回答をするかを調べたところ、被験者の約8割がつけられて誤ってしまうことが判明した。自分の目の確かな証拠を信じるより集団の判断に従ってしまうということを、「孤立」や「多数派の圧力」に注意して理解した。

(4) ホロコーストの中の日常

第1時：【「ショアー」の世界】

第2部で日本陸軍という組織の中の人間の心理に注目したように、第4部ではドイツの組織の中の同様の問題について見ることにした。

そこでまず最初に、ユダヤ人の強制収容所への鉄道輸送に協力したドイツ国鉄について、先に触れたクロード

・ランズマン監督のドキュメンタリー映画「ショアー」の中から3人(元機関士、元ダイヤ編成課員、歴史学者)の証言を取り上げて、映像とプリントを通して見た。

(資料11参照)

彼らの証言から浮かび上がってくるのは、自分の「仕事」をしているだけで、ユダヤ人に対して特別な敵意も持っていない「普通の人間」が、大量虐殺の一翼を担っていた姿である。生徒の感想を見ると、「当たり前のこと」、「普通のこと」として行なえる人間の心理に対する驚きが述べられている。(資料12参照)

第2時：【アドルフ・アイヒマンの生涯】

そして今度はナチス親衛隊というユダヤ人虐殺を直接担当した組織の責任者であった、アドルフ・アイヒマンを取り上げた。彼の生涯を具体的に知るために、日本テレビで放映された「知ってるつもり?!アドルフ・アイヒマン」のVTRを用いた。(資料13参照)

映像の中では、一介の平凡なセールスマンであったアイヒマンが、ナチスの思想ではなく力強さに引き寄せられ、親衛隊という組織の中で初めて自らの居場所を見出して職務に忠実に励み、ユダヤ人問題の責任者となっていく姿が描かれており、またユダヤ人の虐殺に関する彼の実際の仕事が、机の上で計画書にサインをするような「事務的な仕事」であったことにも触れられている。この映像を通して、アイヒマンを「悪魔の化身」ではなく「普通の人間」としてとらえようとした。

第3時：【アイヒマン実験】

最後に、ユダヤ人虐殺の責任者ですらも、親衛隊という組織の「上からの命令」に忠実に服した「普通の人間」であったことの意味を考えるために、先に触れたスタンレー・ミルグラムによる「アイヒマン実験」を紹介した。(資料14参照)

この社会心理学実験は、「体罰の学習効果を探る」と称して、一般から募集した被験者が「教師」役を演じ、隣室の「生徒」(実際は声だけの演技)に質問して、誤った回答をする度に罰として電流ショックを与えるというもので、誤答の回数に比例して電圧も高められていく仕組みになっている。やがて被験者は隣室から聞こえてくる呻き声に躊躇するようになるが、そのとき被験者を見守る「大学の研究者」が実験の続行を指示すると、7割近くの被験者が、生命の危険がある最大電圧まで罰を与え続ける、という結果が得られた。

この結果をもとにして、明らかに基本的道德規範と矛

盾する行為を遂行するように求められたときでも、権威に抵抗することがいかに困難であるかを理解した。

(5) 服従を求める人間の心理

第1時：【ドイツ人少女の見たナチズム】

第4部までは、集団や組織の中での権威の問題を見たが、第5部では、特に「自ら進んで服従を望む」若者に注目して、その心理を解き明かそうとした。

そこで、まず最初に取り上げたのが、ドイツの青少年たちを夢中にさせたヒトラー・ユーゲントについてである。このヒトラー・ユーゲントの雰囲気を知るために、インゲ・ショルが著した『白バラは散らず』⁽¹⁵⁾を資料として用いた。(資料15参照)

この中で、当時のドイツの若者たちが、「偉大な民族共同体」建設を担う「一つの大きな組織だった有機体の一員」としての誇りと自覚を持ち、「ヒトラーは自分のすることをちゃんとわかまえている、だからみんな重大事の前には、気になることやわからないことをのみこむのが当然だ」と考えていた点に注目し、自ら進んで組織の権威に身を委ねる若者の姿をとらえた。

第2時：【自由からの逃走】

そこで次に、「なぜ、自ら進んで服従を求めるのか」という発問を行い、先に触れたエーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』を取り上げた。(資料16参照)

この中でフロムが、権威に服従して身を委ねてしまう人間の心理の根底には、「孤独感に対する耐えがたい恐怖」があり、これを克服するために「個人的自我の絶滅」すなわち「自己の外部の、いっそう大きな、いっそう力強い全体の部分」となって、それに没入することが必要であるとする主張に注目して、権威に服従することは、同時に自ら権威の一部分となってその力と栄光にあやかることを意味することや、それによって「生活の意味」や「自我の同一性」を決定することができること、さらに自ら思考・判断することの放棄に、安楽を見出すことを理解しようとした。

第3時：【オウムからの帰還】

最後に、現代社会で権威に依存した若者が陥る危険性について見るために、先に触れた元オウム信者・高橋英利の『オウムからの帰還』を取り上げた。(資料17参照)

この手記を通して、若者たちが孤独から逃れようとして、オウムに自分の居場所を見出し、「教祖への絶対帰依」

という「自己を空っぽの器にし、そこにグル（教祖）の意志を満たす」ことを目指した結果、大量無差別殺人を実行してしまったこと、そのような反道徳的な命令に対して、「集団としての強力な圧力」の中では、もはや誰も止めようがなかったことを知り、教祖という絶対的な権威に「盲目的に服従」したことで、個人の道徳的判断・思考を放棄してしまったことが、破壊的暴力に加担することにつながったことを意味を考えようとした。

4. おわりに—現代史と現代社会—

まず第一に、全体主義の時代の日本とドイツの社会について、授業を通して浮かび上がった「集団・組織と個人の在り方」の問題点を集約すると、次の3点が挙げられる。

- ①多数派への同調とフィクション（虚構）の現実化
- ②「異質なもの」の排除に対する無関心と恐怖
- ③権威への服従による個人的判断の停止と「反道徳行為」の遂行

こうした問題点を見る目を、今度は現代社会を見る目として再構築していく必要がある。その一例として授業展開の最後の部分でオウム真理教を取り上げた⁽¹⁶⁾が、この他にも応用すれば、いじめなどを扱うことも可能である。そして、さらに一步踏み込んで、それを「どのようにして克服するか」にも言及する必要があるが、現段階では「危険を知り、それに陥らないようにする」ことを喚起するに留めている。

そして第二に、歴史理解に関して触れると、この一連の授業で全体主義の時代を理解したというつもりはない。これはあくまでも、ある角度から切り取って見た現実の一断面にすぎず、これで全体像が描けるとは思っていない。しかし、その一方で、歴史の全体像とは何なのか、その曖昧模糊とした全体像を描こうとするために、かえって歴史の具体的なイメージを阻害しているのではないか、という思いを強くする。

かつてドイツのギムナジウムの教師であったフォックとライマーが、若者が「現代史を学ぶ」ためには、彼らが感情移入できる具体的な状況を示す必要があるとし、ナチスの時代に若者であった人々やその親たちが毎日味わっていた具体的な経験を収集して資料を提示した⁽¹⁷⁾ように、具体性にこだわって等身大の人間像を描くことは、「生きた」歴史感覚を取り戻す一つの方法であるように思える。

これに対して、全体主義が呈する現象面ばかりを見て

いるのではないか、という反論もなされようが、確かにその成立過程や、枠組み、独裁的な支配形態を理解しようとする視点は弱い。しかし、全体主義という言葉自体の持つ意味合いが以前とは変わってきており、従来のファシズムやスターリニズムといった「政治支配の在り方における全体主義」像に加えて、最近では「生活様式における全体主義」像のイメージが強まっていることを考慮に入れる必要がある。⁽¹⁸⁾

これは、ジョージ・オーウェルが『1984年』⁽¹⁹⁾の中で描いたような、日常生活の隅々に及ぶ「管理社会」的様相に全体主義像を見出していこうとする動きと重なる。今後さらにこうした傾向が続けば、全体主義の概念の見直しが求められるであろうし、「下から」見た全体主義の実態の解明が必要とされるはずである。

さらに第三に、このようなテーマを絞った授業を展開できたのは、現代社会という科目であったことにも触れておきたい。これまで私が担当してきた世界史の授業であったならば、通史・全体史の枠にとらわれて不可能であった。現代史はその重要性が指摘されるわりには、通時的に授業を進行させる限り、年度末近くに辿り着くのがやっとで、とても十分な時間がさけるような状況になっていた。

ところが現代社会を担当するうちに、現代史を現代社会の中で生かすことが出来るのではないかと考えるようになった。もはや高校に「社会科」は存在しないが、その理念である「公民的資質」の探求は、歴史教育にも今だ有効なはずである。さらに近年これだけ教科の枠を越えた総合学習の必要性が叫ばれている中で、公民教育だから歴史を扱えないとは考えにくい。生徒にとって意味ある現代史学習を目指すとは、まさに歴史の中に「公民的資質」を問うことに他ならない。

最後に、全体主義の時代を検証し、その今日的な課題を浮き彫りにして、現代社会を生きる手がかりとしようとした私の試みが、当を得たものであったかどうか、また改善の余地はないか、検討していく必要がある。そのためには、生徒からの意見に真摯に耳を傾けると共に、多方面からの批判も仰ぎたいと思う。そして歴史を素材として、新たな視点から現代社会を映し出すための教材化を図っていくことを今後の課題としたい。

【註・引用文献】

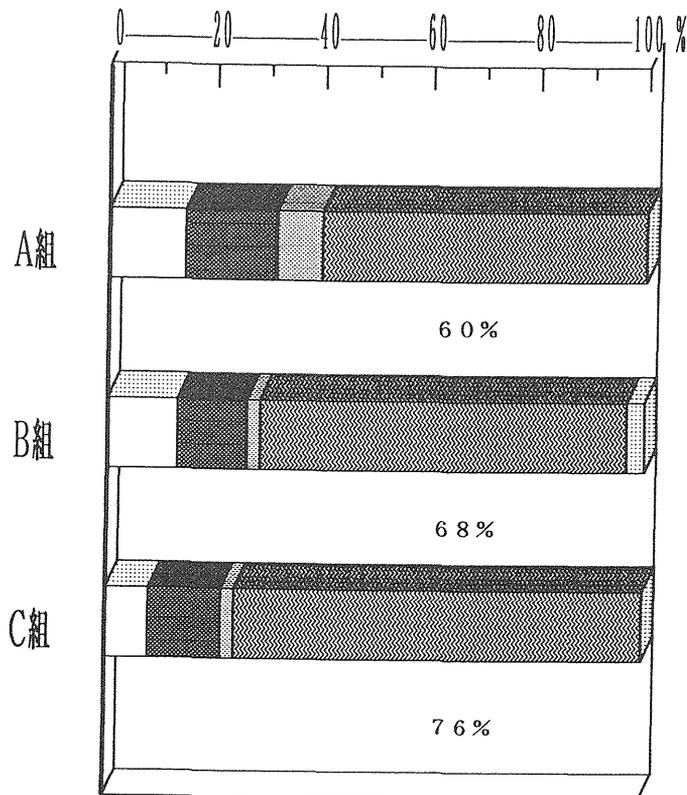
(1) デートレフ・ポイカート『ナチス・ドイツーある近代の社会史』(三元社1991年)

- (2) 山本秀行『ナチズムの記憶』(山川出版社1995年)
- (3) クロード・ランズマン『ショアー』(作品社1995年)
- (4) 藤田省三『《新編》天皇制国家の支配原理』(影書房1996年)
- (5) 妹尾河童『少年H 上・下巻』(講談社1997年)
- (6) エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』(東京創元社1951年)
- (7) ハナ・アーレント『イエルサレムのアイヒマンー悪の陳腐さについての報告』(みすず書房1969年)
- (8) スタンレー・ミルグラム『服従の心理』(河出書房新社1980年)
- (9) 加藤哲太郎『私は貝になりたいーあるBC級戦犯の叫びー』(春秋社1994年)
- (10) 高橋英利『オウムからの帰還』(草思社1996年)
- (11) 早乙女勝元、土岐島雄編『写真・絵画集成 戦争と子どもたち③戦時下の暮らし』(日本図書センター1994年)をもとに作成した。
- (12) アンネ・フランク『アンネの日記 完全版』(文春文庫1994年) 世界中で広く読み継がれてきた従来の『アンネの日記』が実物の短縮版であったのに対して、近年その学術的な資料価値が見直されて完全版が出版された。
- (13) ミルトン・マイアー『彼らは自由だと思っていた元ナチ党員十人の思想と行動』(未来社1963年)
- (14) Asch, S. "Effects of Group Pressure upon the Modification and Distortion of Judgement" In H. Guetzkow (ed.), *Groups, Leadership, and Men*. Pittsburgh: Carnegie Press, 1951
- (15) イング・ショル『白バラは散らず・ドイツの良心ショル兄妹』(未来社1964年)この本はナチス抵抗運動を行なって処刑された著者の弟と妹について書かれているが、ここでは著者自身の体験に注目して取り上げた。
- (16) オウム真理教をより詳しく取り上げた授業展開については、昨年度の本校紀要の中の拙稿「現代史の取り扱いについてー大衆社会の視点からー」を参考にされたい。
- (17) H・フォッケ、U・ライマー『ヒトラー政権下の日常生活ーナチスは市民をどう変えたか』(社会思想社1984年)
- (18) 藤田省三『全体主義の時代経験』(みすず書房1995年)
- (19) ジョージ・オーウェル『1984年』(ハヤカワ文庫1972年)

資料1 アンケートとその結果

質問1 「同じクラス内でいじめを見ました。
他の人たちは見てみぬふりです。
あなたならどうしますか？」

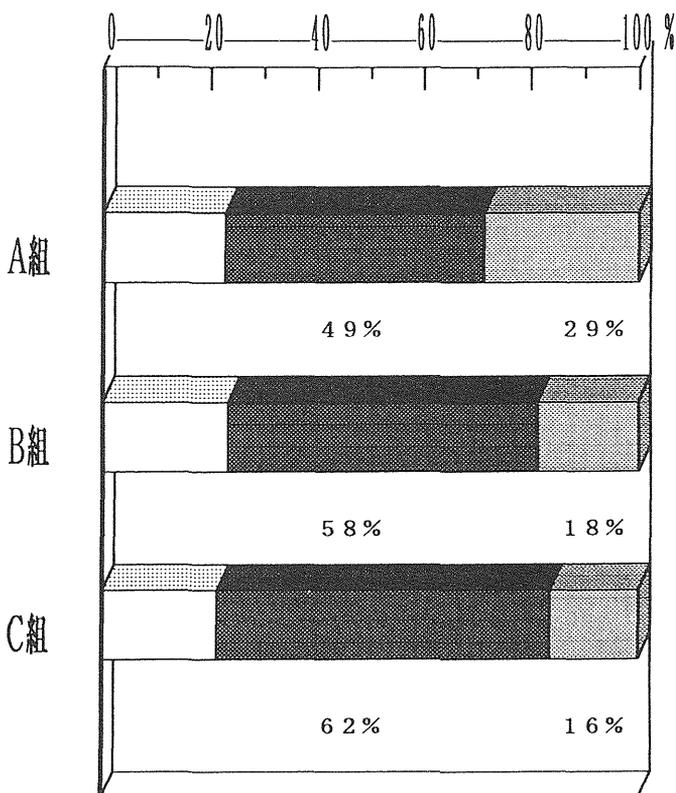
- 回答
- 1 止める
 - 2 先生に相談する
 - 3 親に相談する
 - 4 何もしない
 - 5 いっしょにいじめる



止める
 先生に相談する
 親に相談する
 何もしない
 いじめる

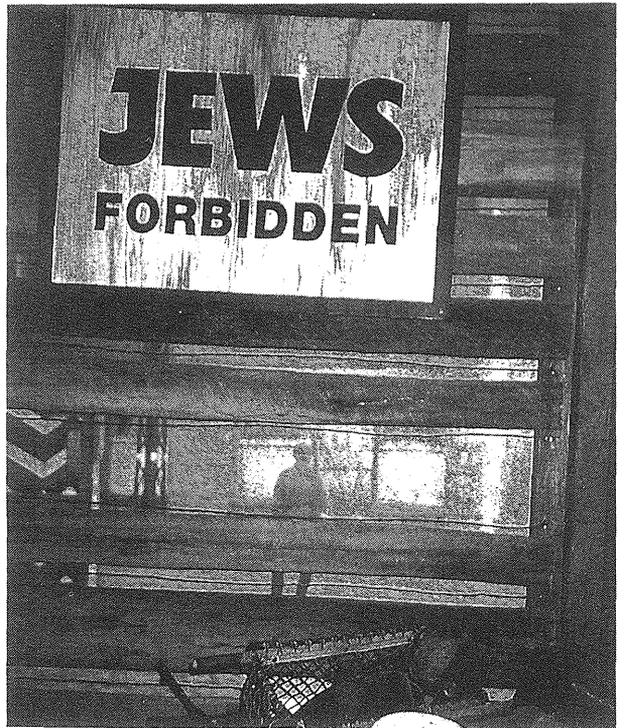
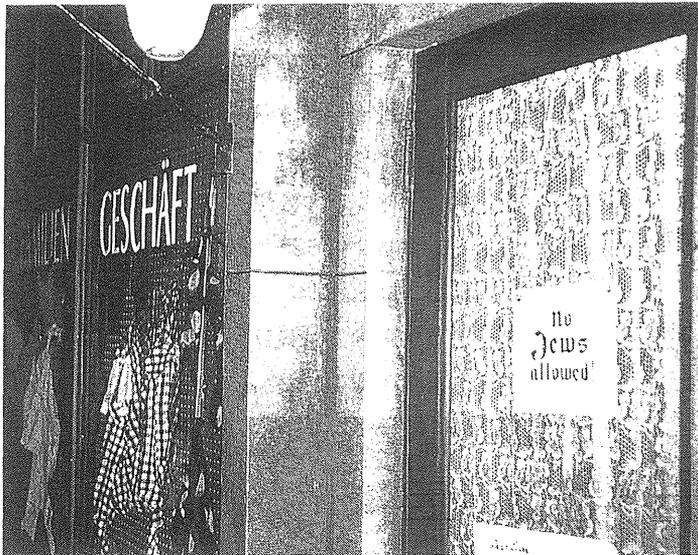
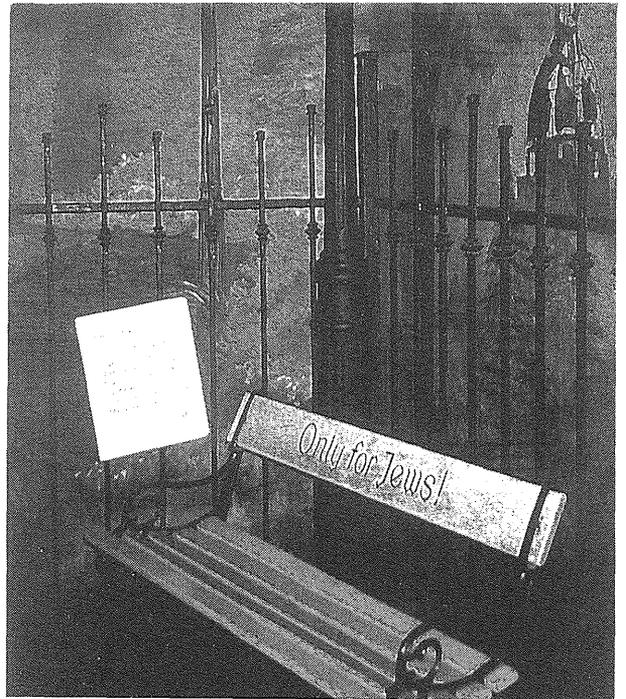
質問2 「電車にお年寄りが乗ってきました。
しかし誰も席を譲ろうとはしません。
座っているあなたなら、どうしますか？」 A組

- 回答
- 1 すぐに席を譲る
 - 2 どうしようか迷う
 - 3 そのまま座り続ける



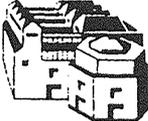
すぐに席を譲る
 どうしようか迷う
 座り続ける

資料2 アメリカ・ホロコースト記念博物館の展示風景



(1994年7月、現地にて撮影)



UNITED  STATES
HOLOCAUST MEMORIAL MUSEUM
100 RAUL WALLENBERG PLACE, S.W.
WASHINGTON, D.C. 20024-2150

資料3 学習指導計画「全体主義の中の日常」

単元	学習内容	学習活動	指導上の留意点・資料
1 3 1	①戦時下日本の日常	<ul style="list-style-type: none"> ・戦時中に作られた「愛国イロハカルタ」で実際に遊び、当時の社会の雰囲気を経験すると共に、その絵や言葉の意味を考える。 ・戦時中の街の写真を見て、当時の日常の風景を知ると共に、疑問点を浮かび上がらせる。 ・妹尾河童著『少年H』の抜粋を読んで、少年の目に映る「不思議」な日常の風景の原因を探る。 発問「アラヒトガミとは何か」 発問「赤紙が来るとなぜ『めでたい』のか」 発問「なぜキリスト教徒が弾圧されるのか」 発問「なぜ役に立たない防空訓練が必要なのか」 発問「誰が『スパイ』なのか」 ・アンデルセン童話「裸の王様」と『少年H』を比較し、問題点を浮き彫りにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ※「愛国イロハカルタ」を班ごとに配布・実演 ※プリント「戦時下の街の風景」配布 ※プリント「少年H」配布 <ul style="list-style-type: none"> ・天皇という権威の名のもとに、集団に同調しないと見なされるものが排除され、またそれを恐れて一層同質化が進んだ集団全体が、戦争遂行という一つの目的に向かってまとめられていく様子を読み取らせる。 ※プリント「裸の王様」配布 <ul style="list-style-type: none"> ・フィクションの現実化・常識化がどのようにして起きるのか、その背景や原因に目を向ける。
2 1	②軍隊組織の中の日常	<ul style="list-style-type: none"> ・ドラマ「私は貝になりたい」の一部を見て、捕虜殺害をめぐる裁判について議論し、上官の命令と個人の責任について考える。 ・ドラマの原作となった加藤哲太郎著『私は貝になりたい』の抜粋を読んで、原作者の体験とその時の心理を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ※TBSドラマ「私は貝になりたい」のビデオ上映 ※プリント「私は貝になりたい」配布 <ul style="list-style-type: none"> ・軍隊組織内での「上官の命令は天皇の命令」という言葉に縛られて個人の意志に反しながらも「犯罪行為」を実行してしまう姿をとらえさせる。
1 3	③ナチス体制下の日常	<ul style="list-style-type: none"> ・アンネ・フランク著『アンネの日記』の抜粋を読んで、ドイツでのユダヤ人の生活が日増しに脅かされていく様子を理解する。 ・ミルトン・マイヤー著『彼らは自由だと思っていた』の抜粋を読んで、一般市民がユダヤ人に対する迫害を黙認してしまった理由を考える。 発問「『普通のドイツ人』は、ユダヤ人の迫害に対して、どのように感じていたのか」 	<ul style="list-style-type: none"> ※プリント「アンネの見たナチスの迫害」配布 <ul style="list-style-type: none"> ・虐殺にのみ目が向きがちなナチスの迫害を、もっと身近な日常生活の場面の中から始まっていったことに気付かせる。 ※プリント「彼らは自由だと思っていた」配布 <ul style="list-style-type: none"> ・「ナチスの時代」が「よい時代」であったと考える「普通のドイツ人」の日常の中では、「異質なものの」が排除されることに対する無関心と、自らが排除されることに対する恐怖とが同居し、同質な社会集団に同調することで安心感を

1		<ul style="list-style-type: none"> ・社会心理学者のアッシュが行なった実験を元に、集団に同調する人間の心理を理解する。 	<p>得ようとしていた点を、読み取らせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ※プリント「あなたは孤立に耐えられるか」配布 ・集団に対する同調を身近な問題としてとらえさせる。
1	④ホロコーストの中の日常	<ul style="list-style-type: none"> ・ドキュメンタリー映画『ショアー』の映像を見て、ホロコーストに携わった「普通の人々」の心理を理解する。 発問「機関車の機関士は、どのような気持ちでユダヤ人の輸送を行っていたのか」 発問「ドイツ国鉄職員は、どのような気持ちで列車のダイヤ編成を行っていたのか」 	<ul style="list-style-type: none"> ※『ショアー』のビデオ上映 ※プリント「ショアー」配布 ・一部の狂信的人間による残虐行為ととらえがちなユダヤ人虐殺を、「当たり前」「普通」の「仕事」として協力していた鉄道関係者の姿を通して、組織と個人の問題について考えさせる。
1		<ul style="list-style-type: none"> ・テレビ番組「アドルフ・アイヒマン」の映像を見て、ナチス親衛隊員アイヒマンの一生を知る。 発問「アイヒマンの少年時代はどのようなものであったか」 発問「アイヒマンがナチスに求めたものは何であったのか」 発問「アイヒマンが実際に行なった仕事は何であったか」 	<ul style="list-style-type: none"> ※日本テレビ放映『アドルフ・アイヒマン』のビデオ上映 ※プリント「アドルフ・アイヒマン」配布 ・ナチス親衛隊という組織にあって一人の平凡な人間が、職務を「忠実に」果たして、虐殺の責任者となっていく姿をとらえさせる。 ・アイヒマン自身は「机の上の事務的な仕事」ととらえていたことに注意する。
1		<ul style="list-style-type: none"> ・社会心理学者のスタンレー・ミルグラムが行なった「アイヒマン実験」の結果を元に、権威に対する服従がもたらす問題点について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ※プリント「アイヒマン実験」配布 ・「合法的」権威が他人に危害を加えるよう命じると、大多数の人が従うことから、権威に対する抵抗が困難なことに気付かせる。
1	⑤服従を求める人間の心理	<ul style="list-style-type: none"> ・インゲ・ショル著『白バラは散らず』の抜粋を読み、ヒトラーユーゲントに積極的に参加した著者の心理を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ※プリント「ドイツ人少女の見たナチズム」配布 ・自ら進んで組織の権威に身を委ねる若者の姿をとらえさせる。
1		<ul style="list-style-type: none"> ・エーリッヒ・フロム著『自由からの逃走』の抜粋を読み、自ら服従を求める人間の心理を理解する。 発問「なぜ人は自由を逃れて自ら権威に服従しようとするのか」 	<ul style="list-style-type: none"> ※プリント「服従を求める人間の心理」配布 ・孤独感の恐怖から逃れようとする人間が、自己の外部の権威あるものに服従し、自ら思考・判断することの放棄に安楽を見出す、とする主張を読み取らせる。
1		<ul style="list-style-type: none"> ・元オウム信者の高橋英利が著した『オウムからの帰還』の抜粋を読み、オウムに参加した若者たちの心理と、授業で取り上げてきた人物の心理とを比較して、現代社会における集団・組織と個人の在り方の問題を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ※プリント「オウムからの帰還」配布 ・破壊的暴力を生み出したオウムの問題を、教祖の狂信的なマインドコントロールとしてとらえるのではなく、信者の側から見た、教祖に対する盲目的な服従や、組織・集団への同調に起因するものとして把握させる。

資料4 愛国イロハカルタ

テツセキタン
アルミヒカウキ
フネ
ヒリヤウ

ナカヨシ
コドモノ
トナリ
グミ

ルストラ
マモツテ
カチ
ヌカウ

イセノカミカゼ
テキコク
カウフク

キミガヨ
ウタフ
アサノ
ガクカウ

ラッパ
シンケン
ヘイタイ
ゴツコ

ワラヂデ
キタヘタ
オデイサン

バイデ
ハジマル
ゴホウコウ

エキモ
カヘリモ
レツクンデ

ムラモ
ゾウサン
マチモ
ゾウサン

カガヤク
ムネノ
シヤウイ
キシヤウ

ニッポンバレノ
テンチャウ
セツ

ミツダ
バケツダ
ヒタタキダ

ウツテ
キタヘル
ニッポン
タウ

ヨセクル
クロシホ
ウミノコ
ワレラ

ホマレハ
タカシ
キウグンシン

シュツセイ
カゾクヘ
オテツ
ダヒ

井モンブクロ
ニ
テガミヲ
イレテ

タダシイ
ケイレイ
タダシイ
ココロ

トウアラ
ムスブ
アイウエオ

モンベデ
ハタラク
オカアサン

ケサモ
ハヤオキ
レイスキ
マサツ

レンセイデ
ノビル
セウコクミン

チヒサイコト
カラ
オホキナ
ハツメイ

センセイニ
ホメラレタ
チョキンバコ

フジヲ
アフイデ
コクミン
タイサウ

ツギノ
ニッポン
ボクラガ
ニナフ

リクワシ
ウミワシ
ボクラモ
ツツク

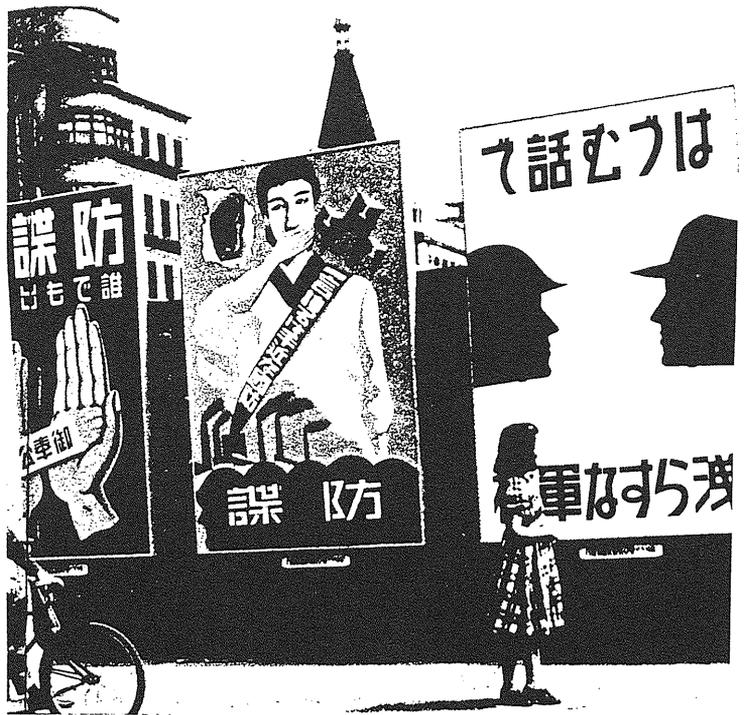
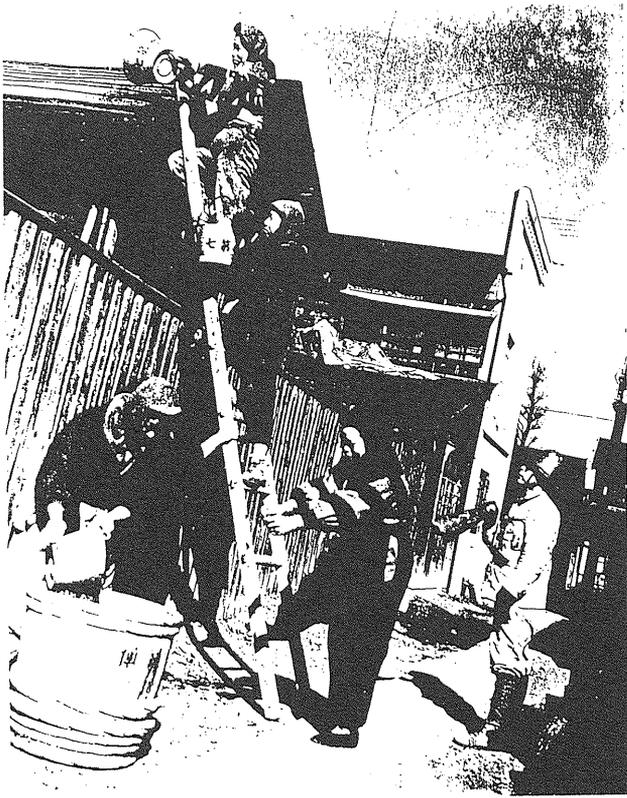
スグレタ
クニガラ
セカイガ
アフグ

エイレイ
シヅマル
ヤスクニ
ジンジャ

ネエサンガ
ヌフ
ラクカサン

ヌグフ
アセミツ
キンラウ
ホウシ

資料5 配布プリント「戦時下の街の風景」



少年H

妹尾河童

講談社



「H」とその家族

「H」 本名・肇（はじめ）
「H」の文字がセーターに編みこまれていたことから、「エッチ」のあだ名で呼ばれている。底抜けに陽気でたくましく、正義感の強い悪童。

父・盛夫

「妹尾洋服店」を営む仕立て職人。Hの「なんで？」の質問攻めにも丁寧な答え、何が真実かを常に考えさせてくれるレベラリスト。戦時中、消防士となる。

二 赤紙

いつものようにHが木型屋で遊んでいるとき、郵便屋さんが召集令状を配達しに来た。兄さんに「赤紙」を渡し、受け取りのハンコをもらいながら、郵便屋さんは、「おめでとーございませう」といつていたが、ちよつと気の毒そうな顔をしていた。

ピンク色の召集令状をじっと見ていた兄さんと小声で話していた小母さんは、仏壇に手を合わせチーンと鐘を叩いてから、黙って二階に駆け上がった。

兄さんは機械を止めて、追いかけるように上がっていったが、しばらくして泣き声が聞こえてきた。三男の勝義はそれを聞いても、わざと知らんふりをして、Hとの遊びをつづけていた。隣の豆腐屋の小母さんが、木型屋にも召集令状が来たことを郵便屋さんから教えられたのか、慌ただしく駆け込んできて、「やっぱり来たんか」と何回もいった。

二階から降りてきた兄さん呼びとめた小母さんは、

「赤紙が来たら行くよりしょうがないけど、弾に当たらんように気をつけや。元気に帰ってくるんやで。白木の箱に入って遺骨になって帰ってきたらあかんよ。お国のために手柄なんかたんでええからな。出征の日の挨拶でも、死んで護國の鬼になる。みたいなこというたらあかんで。そういう人は弾に当たりやすいわね」といった。

お兄さんは、小母さんに「うん、わかってる」と頷きながら小さな声で返事をした。ところが、壮行会の日の挨拶はまったく違っていた。いきなり大きな声で、

妹尾河童（せのお・かっぱ）

1930年神戸生まれ。グラフィック・デザイナーを経て、1945年、独学で舞台美術家としてデビュー。以来、演劇、オペラ、ミュージカルなど幅広く活躍中の日本を代表する舞台美術家。「紀伊國屋演劇賞」「サントリー音楽賞」「芸術祭優秀賞」「兵庫県文化賞」ほか多数を受賞。またエッセイストとしても知られ、ユリセラーの「ヨーロッパ」「インド」など話題のベストの著書も多い。本作品「少年H」は、著者初の小説。

「待ちに待った召集令状がきました。天皇陛下の兵士として召される以上、戦場でお国のために戦って死ぬことは、日本男子の本懐とするところでありませう。帝國軍人として生還は期せず立派に戦ってまいります。では行ってまいります」といった。

聞いていた近所の人はビクビクして盛大に拍手をした。驚いたのは挨拶よりも、声の大きさだったかもしれない。というのは、木型屋の兄さんが大きな声を出したのを一度も聞いたことがなかったからだ。弟の勝義と違って、いつも小声で話す静かな人であった。だからいつも小母さんに、「もつとハッキリいうたらどうや。あんたは男やろう！」といわれていた。

その人が、まさかこんなにハッキリした声で挨拶ができるとは思ってなかったのだ。Hが驚いたのは、声の大きさだけではなく、まるで「戦陣訓」そのもののようなことをいったからだ。兄さんはウソをついていると思った。赤紙が来るのをずっと待っていたというのにも本當のことではない。赤紙が来たので、軍人らしく見えるようにカッコつけたのに違いない。

Hは、駅まで送る行列の中で歩きながら考えこんでしまった。家に帰ってすぐ父親に訴えた。「ぼくはガツカリした。兄さんは、なんで自分が思っているのと違うことをいうたんやろう？あの家の人、赤紙が来たとき喜んでなんかいなかったよ。出征兵士の挨拶はみんないうことが決まるとるけど、兄さんまで新聞に書いてあるのと同じようなことをいうとは思わなかった」とすると父親が意外なことをいった。

「いや、お兄さんはあのと、家外今まで黙ってた自分の気持ちをいうたのかもわからんよ」「えっ！ なんて？」

「小母さんや家族の者は、お兄さんを兵隊に採られたくないし、戦死せずに無事に帰ってきてほしいと思ってるのは本當の気持ちや。それはあんたも見てたとおりやと思う。それはお兄さんにもようわかっているんや。わかっているけど「お国のために命を捧げるのは男の務めや」というお兄さんが思いつめとる精神は変えられん。それをお母さんにいうと悲しむから黙っていたんやろ。お兄さんも悩んだけど、出征する日にハッキリいうてしようたんやと思う。木型屋のお兄さんは、一人前の男になったことを、自分にもみんなにも宣言したかったのかもわからん。赤紙が来た以上は死ぬことも覚悟せんならんからな。「お国のために命を捧げる」ということで、母親にもその覚悟をさせたかったんやないのかな。若い人は純粋やからなあ……」

Hはそれを聞きながら、なんだかムカムカするようないやな気分になった。

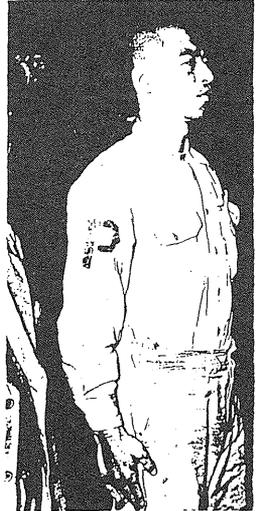
「お父ちゃんのいうてることは理屈におうてへん。ほんなら、戦争はイヤやと思ってるばくは男らしゅうないのんか？ ぼくは純粋やないのんか？ いつからこんなにヤヤコシイことになったんや！ 男はみんな、天皇陛下のために死ぬために生まれてきたんか？ それ以外は正しくないのんか？ そんなのぼくはイヤやで、どこかへんやと思う」

どこからかへんのか、Hにはよくわからなかったが、「とにかくへんだ」という思いは拭えなかった。Hは、学校も家の近くも、新聞に書いてあることも、ほとんどへんになってきていると思つた。信用していたお父ちゃんも、ちかごろはときどき意味がわからないヤヤコシイことをいうようになった。

私は貝になりたい

—あるEC級戦犯の叫び—

tesutarou katoh
加藤哲太郎



再審裁判の法廷に立つ加藤哲太郎

加藤哲太郎

大正6年（一九一七）作家加藤一夫の長男として東京に生まれる。慶応大学経済学部卒業。北支那開発株式会社に入社。召集され中国大陸や内地の野砲連隊に配属。後に語学力を買われて俘虜收容所勤務となる。敗戦時は陸軍中尉で東京俘虜收容所新潟第五分所長。戦犯に問われ絞首刑の判決を受ける。マッカーサー元帥への助命嘆願運動が実り、軍事裁判でただ一人裁判のやり直しとなり命を長らえる。その結果、栗田プリズンでの膨大な著作が生まれ、「私は貝になりたい」がここに誕生した。昭和51年、享年59歳で病没。

一 中国人捕虜の処刑

二十四歳で軍隊にとられた私は、平凡な、善良な、感情が豊かでやや強すぎ、あたまも悪くはなく、読書と映画をみることが唯一の道楽というお坊ちゃん気質で、当時は両親も健在であり、あまり物質的に不自由を感じたこともなく、どうやら人並みに大学も出て或る大会社に入社したばかりの、新入サラリーマンでありました。客観的にみて、私と床屋の清水君とはあまりにも異なった生活環境にあったといえます。

昭和十五年の暮、二十四歳で中国の戦線へ応召された私は、終生忘れ得ぬ凄惨な光景に直面しました。初年兵の実戦的訓練という名目で連れ出された私たちは、八路軍という嫌疑で捕まった十人ばかりの中国人捕虜の処刑を命ぜられたのです。捕虜の背中の左肩に赤いチョークでくつきりと×を書き「ここを突け」という命令でした。その中には「おれは八路兵ではない。その部落には父親も母親もいる。助けろとは言わぬ、もう一度調べてくれ」と叫ぶ少年もいたのです。中国語の少しわかった私は、あわれな少年の番がまわってきたとき、思わず前に出て「待ってください、八路ではない、罪がないといっています。待って下さい」と叫びましたが、命令を下したD中尉は、「ささま、血を見て逆上したな。いいか、これは憲兵隊で十分調べられて、八路とわかっているのだ。たとい一人や二人良民がまじっていたって、もう手遅れだ。この処刑は中隊長殿から命ぜられた。命令は天皇陛下の命令だ。お前は命令がどんなものであるか知っているだろう。たとい間違っているも、命令は命令だ。ことの如何を問わず命令を守らなければ、戦争はできん。わかったか。わかったらひっこめ」と落ち着きはらっていいのでした。

その少年は目かくしされ、刺し殺されました。そして突き殺される一瞬前で、「八路でない」と叫びました。最後の言葉は、「母さん」でした。声がなくなっても、肺臓は無

実を訴えていました。口からブツブツと血の泡がふき出して、ゴロゴロと喉を鳴らししました。ほかの人たちは一言も発せず、従容として死についたのです。

私は、引っこんでいろ、という言葉をもらった幸いに、とうとう手を下さずに済んだのですが、もし、中尉の気がかわって「お前もやれ」といわれたならば、とうてい逃れるわけにはいかなかったでしょう。このおそろしい恥ずべき体験で私の神経は狂い、すっかり人間が変わったといえます。

二 俘虜（ふりよ） 收容所にて

ここでもいろいろなことがありました。俘虜将校を自発的に働かせるという命令が、陸軍大臣——俘虜管理部長——東京俘虜收容所という径路で来る日はついにきました。戦局はようやく我軍の落ち目になっていました。映画「戦場にかける橋」の中に出る早川雪洲の役目が私でした。違うところは、私には僅か横田軍曹（仮名）と二人の通訳兵くらいしか手足がなく、しかも五、六十人の英米濠の高級俘虜将校を働かさなければならぬのでした。

横田氏はW大出の、私と同年代の好漢で、金持の息子で、鷹揚で明るい性格の持主でした。

「こんな戦争に巻き込まれ、こんな所に来た以上、どうせ我々は無事には済みませんよ、仕方がない、やりましょう。加藤少尉殿だって、まさか戦争に勝つとは思ってらんでしょ、どうせ先は見えます。今の今を要領よくやりましょうぜ」

ついに私も、今の今を要領よくやる決心をしたのです。「明日より、俘虜将校は全員就労すべし、これは命令である」。その時、米軍大尉マーチンが「私はその命令を拒絶する」といったのです。マーチン大尉がいったことは、結局こういうことです。——日本軍の命令が天皇の命令であったとしても、また天皇が神であっても、それは自分たちには関係がない。余計なようだが、日本人は天皇の命令ならどんな悪いことをしてもいいというのか？ 日本人同士がそう信ずるのは勝手だ、しかしそれを我々に及ぼすのはけしからん、俺は祖国を裏切らんぞ。何が天皇だ、笑わせるな、天皇の糞野郎……という次第でした。

対分所関係の本来の本所事務をとる軍属の通訳や、通訳兵も隣室から出て来て唾をのんで成り行き如何と注視しています。私はグツと詰まりました。理はマーチンにある、しかし他の日本人の面前で天皇が侮辱されては、済まされません。私のもつとも痛い所、立場が逆なら私もそういいたいところを逆に突かれ、私は理性を失いました。

「私に任せて下さい」と横田君が止めにはいりましたけれど、彼だけにいやな役目をさせる訳にはいけません。私の手も汚れている。日立でも規則を破った俘虜をなぐったことがある。なるようにしかならない。私はマーチン大尉をなぐり倒し、足蹴にしました。六尺近いアメリカ人でも抵抗なしにやられてはたまりません。可哀相にマーチンは、明日から働くと言わざるを得ませんでした。こんな勇氣のある人間、尊敬に価する一人の人間を足蹴にした時、私は魂を悪魔に売ったのでした。

資料9 配布プリント「アンネの見たナチスの迫害」

アンネの見たナチスの迫害

一九四二年六月二十日、土曜日

わたしのパパ、わたしの目から見ても世界一すばらしいパパは、三十六のときにママと結婚しました。ママはそのとき二十五でした。お姉さんのマルゴは、一九二六年にフランクフルト・アム・マインで生まれ、そのあとわたしが、一九二九年六月十二日に生まれました。わたしは四歳のときまでフランクフルトで暮らしましたが、わたしたち一家はユダヤ人なので、一九三三年にドイツを出て、このオランダに移住し、パパはジャムを製造しているオランダ・オペクタ商会の社長になりました。わたしのママ、エーディット・フランク・ホールレンダーは、その年九月にオランダへ移り、マルゴとわたしとは、いったんアーヘンにいるお祖母ちゃんのところへ行きました。そのあとマルゴは十二月にオランダへき、つづいてわたしが二月にこちらへきて、ちょうどマルゴへのお誕生日の贈り物がわりみたいなことになりました。

ドイツに残ったわたしたち一族のほかの人たちは、ヒトラーのユダヤ人弾圧政策のあおりをまともに受け、不安な生活を送っていました。一九三八年になって、あちこちでユダヤ人の虐殺が始まると、ふたりのおじさん（おかあさんの兄弟）はアメリカへ逃げ、お祖母ちゃんもわたしたちのところへきました。そのとき七十三歳でした。

一九四〇年五月からは、いよいよ急な坂をころげおちるように、事態は悪いほうへ向かいました。まず戦争、それから降伏、つづいてドイツ軍の進駐。わたしたちユダヤ人にとって、いよいよほんとうに苦難の時代が始まったのは、このときからです。ユダヤ人弾圧のための法令が、つぎからつぎへと出され、わたしたちの自由はどんどん制限されてゆきました。ユダヤ人は黄色い星印をつけなくてはならない（（訳注 ユダヤ人は他の民族と区別するため、ドイツ軍の命令により、黄色い星印をつけなくてはならない））。ユダヤ人は電車に乗ってはいけないし、たとえ自家用車でも、自動車を使ってもいけない。ユダヤ人は午後の三時から五時までのあいだにしか買い物ができない。ユダヤ人はユダヤ人の床屋にしか行ってはいけない。ユダヤ人は夜八時から翌朝六時まで、家から一歩も出てはいけない。ユダヤ人は劇場や映画館、その他の娯楽施設にはいることを許されない。ユダヤ人はプール、テニスコート、ホッケー競技場、その他いっさいのスポーツ施設に立ちいってはならない。ユダヤ人はポート遊びをしてはいけない。ユダヤ人は公共スポーツに加わることは許されない。夜八時以降は、自宅であれ、知り合いの家であれ、庭に出てすわってはいけない。ユダヤ人はキリスト教徒を訪問してはいけない。ユダヤ人はユダヤ人学校にかよわなくてはならない。そのほか、似たような禁令が山ほどあって、すべてが、これはだめ、あれもいけないと禁じられてるありさま。かといって、毎日生きてゆくのをやめるわけにはゆきません。ジャックはよく言っていたものです。「これをするには禁じられてるんじゃないか、そう思うと、なにをするのにも臆病になっちゃうわ」って。

これまでのところ、わたしたち一家四人は、あらゆる点でいちおう順調にやってきました。いよいよこれからは現在のこととなり、一九四二年六月二十日の日付けから、あらためて本腰を入れて日記を書きはじめることになります。

文春文庫

アンネ・フランク

Anne Frank

1929年6月12日、ドイツのフランクフルト市で裕福なドイツ系ユダヤ人家庭の二女として生をうける。1933年、迫害の手を逃れて一家はオランダのアムステルダム市に移住するが、1942年7月、姉マルゴの召喚を機に一家は隠れ家生活に入る。ついに1944年8月4日、密告により連行されたアンネはアウシュヴィッツ、ついでベルゲン=ベルゼンに送られ、そこでチフスのため15年の生涯をおえた。1945年2月末から3月初めと推定される。1942年6月12日から44年8月1日まで書きつけられた日記は、永遠の青春の記録として世界中の人びとの胸をうってやまない。



5歳のアンネ



「ユダヤ人お断り」。水泳プールの看板の前で立ちすくむ子供たち。

後ろ手に水溜を握りしめている

資料10 配布プリント「彼らは自由だと思っていた」

彼らは自由だと思っていた

……元ナチ党員十人の思想と行動……

M・マイヤー著
田中浩・金井和子訳

未来社

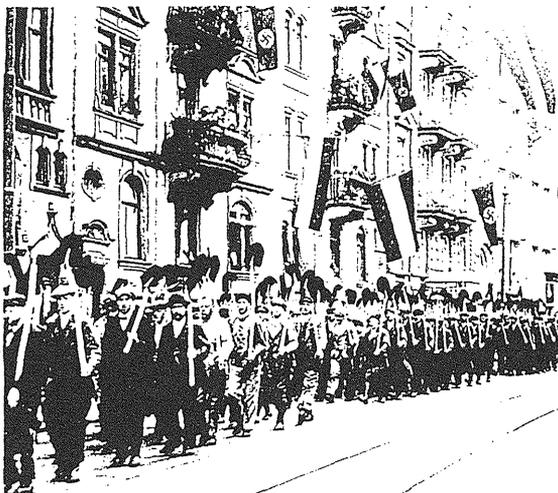
人びとが真っ先に思いだすのは、自分たちが送った生活や、目にした事柄——なかでもそれは、異常な事柄よりも毎日の生活のなかで彼らが日常的に出会った事柄——である。国民社会主義だと思っているものによって、私の九人の友人たちの生活は——例外的存在の教師の場合でさえ——苦勞が減り、未来に希望がわいてきた。いま、彼らは当時をふりかえり、当時の生活がいちばんよかったと思っている。それは当時の生活が、仕事や仕事の保障、子供向けのサマーキャンプ、道路で子供を遊ばせないようにするヒトラー・ユーゲントのある生活だったからである。生活とはそういうものではないだろうか。母親が何を知らたいかといえば、自分の子供がどこで、だれと、なにをして遊んでいるかということである。当時、母親はそれを知っていたし、知っていると思っていた。知っていることと、知っていると思っていることに違いがあるのだろうか。家庭のなかはうまくいっていた。家庭のなかや仕事がいまよくいっているとき、夫や父親は、それ以上知りたいたいことがあるだろうか。

生活はいちばんよかった。国内であれ国外であれ、旅行することなど夢にも考えたことのない人びとに、「喜びを通して力を」は、夏のノルウェー旅行と冬のスペイン旅行を、家族向けの素晴らしい一〇ドル休暇旅行として与えてくれた。そしてクローネンベルクには、寒さに震えるものや、ひもじさに苦しむものや、手当ての受けられない病人は「一人もなかった」（私の友人たちの知己には、そんな人はだれもいなかったのである）。彼らの知己はだれかといえば、近隣の住人、地位や職業の同じ

人たち、政治問題について（あるいは非政治問題について）同意見のものたち、宗教や人種の同じ人たちであった。新体制の恵みがいたるところで宣伝されていたし、その恵みは「あらゆる人びと」に及んでいた。

戦慄するような事件もあった。しかし、これらの事件はどこにも宣伝されなかったし、「だれも」知りもしなかった。アメリカでは、ときたま（本当にときたまだったが）、新聞が、地方刑務所内でおこなわれる非人間的状況を暴露するセンセーショナルなキャンペーンをする。しかし、ドイツでは、たとえ（その数はアメリカよりはるかに少ないだろうが）、そういう新聞があったにしても、私の友人たちのなかにはそういう新聞を読んだものは一人もいなかったらう。それに、当時はそういう新聞は一紙もなかった。戦慄するような事件が、私の十人の友人たちの日々の生活に衝撃を与えることも、彼らの注意をひくこともなかった。クローネンベルクの街頭で、「ちょっととした騒ぎ」があり、一、二の友人が現場を二、三度通りかかったことはある。しかし、警察が群衆を追い散らし、事件は新聞沙汰にもならなかった。「街頭のちょっととした騒ぎ」なら、われわれでも警察に処置をまかせらう。クローネンベルクの私の友人も同じだった。

一九三八年一月一日付けのクローネンベルカー・ツァイトツング紙は、四面の一番下の段に、「保護検束」というごく小さい見出しをつけて、「多数のユダヤ人男子が、昨日、身柄の安全のために保護され、今朝、町から移送された」との記事をのせた。私は、この記事を十人の友人の一人一人にみせたが、この記事やこれに類する記事を見たことを覚えているものは、教師を含めて一人もいなかった。



作業現場に向かって行進する労働者たち



職を求めて行列するドイツ人失業
者たち。ベルリン、1932年

SHOAH

Claude Lanzmann
クロード・ランズマン
高橋武智 ◆ 訳
作品社

ヘンリック・ガブコフスキ

「トレブリンカ収容所へユダヤ人を移送していた機関手、ポーランド人男性、トレブリンカ近くのマフニア荘。当時と同じルートで機関車を運転しながら（ポーランド語）」

うしろから、運転する機関車のうしろから、
叫び声が聞こえましたか？
もちろんじゃないか。

ユダヤ人を積んだ貨車は、すぐうしろだったんだから。
ユダヤ人は、大声をあげて、水を欲しがっていた。
すぐ背後の、貨車からあがる叫び声が、
耳に入らないわけがない。それに気をとられないわけがなかった……。
慣れたんですね？

いや、いや。
とっても辛かった。

うしろにいる人たちが、この私と同じ人間だということが、
よくわかってきたからね。
けれど、じつを言うと、
ドイツ兵は、私にも、同僚にも、
飲むようにと言って、ウオトカをくれていた。
呑んだ勢いでも借りなければ、私らにの仕事は、できなかったでしょうよ……。
特別手当みたいなもので、
現金じゃなく、

アルコールで支払われていた。
ほかの列車に勤務する者には、
この手当は出てなかった。

私らにももらったウオトカを、すっかり飲み干したもんです。
アルコールなしじゃ、
ここに来るたびに感じた、
あの嫌な臭いに、耐えられなかったらうよ。
それどころじゃない。酔いにまぎらわそうと、
自分から、アルコールを買ったことだってありましたよ。

資料11 配布プリント「ショアー」

列車を見たことは、一度もないんですって？
ええ、一度もありません。ただの一度もですよ。
仕事に追われてましてね、デスタを離れられなかったのです。
私どもは、昼夜の別なく、働いてました。

「ドイツ国鉄（ライヒスバーン）の元第三三三機務員
元ナチ党員、ドイツ人男性、隠し携り（ドイツ語）」

ヴァルター・シュテイデル

たとえば、トレブリンカが絶滅収容所の意味だということは、
二件でしたか？
もちろん、知るわけないでしょう！
ぜんぜん、二件じゃなかったと？
もちろんですよ。なんてことをおっしゃるんです！
私どもが、どこから知ったんです……？
だいたい私は、トレブリンカに足を踏み入れたことがないんですからね。
クラクフや、ワルシャワについて、デスタに郵便けだったんです。
すると、あなたは……。
根っからの、役人だったんですよ。
いや、何にも知りませんでしよ。
なるほど。でも、驚きますね。
ドイツ編成隊で働いていた人が、
「最終解決」のことを少しも知らなかったとは、
なにしろ、戦争だったんですからね……。
鉄道関係者で……、知っていた人は
ほかに、いたんじゃないですか。
たとえば、車掌とか……。
いないですね。
そりゃあ、車掌は、目にはしたでしょう、彼らはね。
だからといって、あのことについて、この私が……。
あなたにだって、トレブリンカとは、何でしたか？
あるいは、アウシュヴィッツとは？
ええ、ええ。トレブリンカ、ベウジエツなどは、
私どもにとっては、収容所のことでした。
列車の目的地で……。
目的地、それだけです。
死とは、関係なかった。
そのとおりですよ……。

「歴史学者、ユダヤ問題の専門家、米國、ヴァーモント大学政治学教授
渡、ハイリントン在住。列車（運行指令書）を示しながら（英語）」

ラウル・ヒルバーク

ところで、絶滅作戦総体を心理的観点から理解する鍵は、
一つ一つの行動を、
それにふさわしい言葉では、決して呼ばないということだった。
ただ黙って、
これこれと、
つべこべ説明などするな、というのが原則である。
ドイツ国鉄は、原則として、料金の支払いさえあれば、
どんな種類の積荷でも、運ぶ用意があった。
この基本的な考えの方から、料金表どおり、
キロ当たり、いくらくらの「ミニヒ」【*Minih*】を支払えば、
トレブリンカ、アウシュヴィッツ、ソビブル、
あるいは、どこへだとうと、
ユダヤ人を移送する用意があったわけだ。
基本的な運賃体系は、戦争中の全期間を通じて、変わらなかった。

「歴史学者、ユダヤ問題の専門家、米國、ヴァーモント大学政治学教授
渡、ハイリントン在住。列車（運行指令書）を示しながら（英語）」

ラウル・ヒルバーク

十歳未満は、半額で、
四歳未満は、無料。
料金は片道だけ。
監視兵だけは、むろん帰りの運賃もかかった。
出発地に戻らなければならないからね。
ちよつとかがいますか、絶滅収容所へ送られた
四歳未満の子供たちは……。
……ただで、ガス殺されるという思惑に浴していたのですか？
そう、移送費は無料だった。
おまけに、運賃の支払い機関、つまり、
列車の注文を出した機関は、
ゲシュタポの中のアイヒマンの部局で、
しかも、この機関は、財政上の問題をかかえていたために、
ドイツ国鉄は、団体料金を認めていた。
したがって、ユダヤ人は、団体の優待運賃で、運ばれた。
そこで、ユダヤ人は、
最低四〇〇人からの団体に適用される貸切料金と同じような、
団体の優待運賃で運ばれることになった。
仮に四〇〇人未満でも、四〇〇人と申告すればよいわけで、
そのため、成人の場合も半額ですんだのである。
これが基本原則であり、
次に、貨車の中がいちじるしく汚れたり、
あるいは、備品が傷んだりした場合、
——走行距離は長く、移送者の五パーセントから一〇パーセントが途中で死んだのだから、
どちらの場合も、稀ではなかったが——
損害に対しては、むろん、追加料金が請求された。
しかし、原則として、
運賃支払いが行なわれる限り、輸送は行なわれた。
時には、SSがツケを認めさせ、
支払い前に、輸送させることもあった。
というのは、いいですか、あらゆる旅客業は
——貸切旅行だろうが、個人だろうが、どんな種類の旅行でも——、
たった一つの旅行会社が、取り仕切っていたからだ。
すなわち、〈中欧旅行社〉で、これが料金の請求や、切符の発売等の業務にあたった。
えっ、ほんとに、普通の旅客を扱うのと同じ旅行社ですか？
まったくそのとおり。同じ正規の旅行社ですよ！
そこが、ユダヤ人を、ガス室に送りし、
ヴァカンス客を、お好みのリゾート地に送っていただいたのだ。
旅行社も同じなら、取引も同じ、
手続も、請求方法まで同じだった。
何の違いもなく？
まったく、なかった。
そして、実際だ、だれもが、この世で最も当たり前のことのように、
この仕事をこなしていたのだ。
当たり前のことではなかったのに！
そう、当たり前のことではなかった。

資料13 配布プリント「アドルフ・アイヒマン」

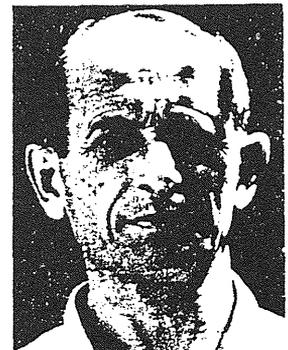
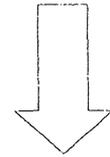
アドルフ・アイヒマン

—「事務室の中の大量虐殺者」—

1906年		3月19日、ドイツのゾーリンゲンに生まれる。
1914年	8才	路面電車会社に勤める父の転勤で、オーストリアのリンツへ移る。
1916年	10才	母死亡。後に父は再婚。
1919年	13才	リンツ実科学校へ進学するが、成績不振で落第。
1923年	17才	大学進学をあきらめ、国立電気機械専門学校へ編入学。
1924年	18才	退学して鉱山に就職するが倒産。リンツの電気軌道工業会社のセールスマンとして再就職。
1932年	26才	ナチスに入党する。
1933年	27才	1月、ヒトラーが政権を取る。 6月、ナチス親衛隊に入隊。
1934年	28才	ベルリンの国家公安本部に勤務。ユダヤ人対策として、ユダヤ人を強制的に国外移住させることに従事する。
1935年		ベロンカ・リーベルと結婚。
1939年	33才	9月、ドイツ軍がポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が始まる。
1941年	35才	ユダヤ人の処刑に関わり始める。
1942年		ヴァンゼー会議で、1100万人のユダヤ人の最終解決＝地上からの抹殺が決定され、ユダヤ人の大量虐殺を指揮する。
1944年	38才	ハンガリーで捕らえたユダヤ人に、「死の行進」を命令する。
1945年	39才	5月、ベルリンが陥落し、ドイツ敗戦。アメリカ軍に逮捕されるが逃亡。
1950年	44才	アルゼンチンのブエノスアイレスに入る。以後、リクルト・クレメントの偽名を使って暮らす。
1960年	54才	ドイツより、妻子を呼び寄せたことがきっかけとなり、イスラエルの秘密警察に拉致され、イスラエルへ連行される。
1961年	55才	エルサレムで裁判の結果、死刑判決を受ける。
1962年	56才	5月31日、絞首刑により死亡。
1963年		アメリカ・エール大学の心理学教室で「アイヒマン実験」が行なわれる。



1936年

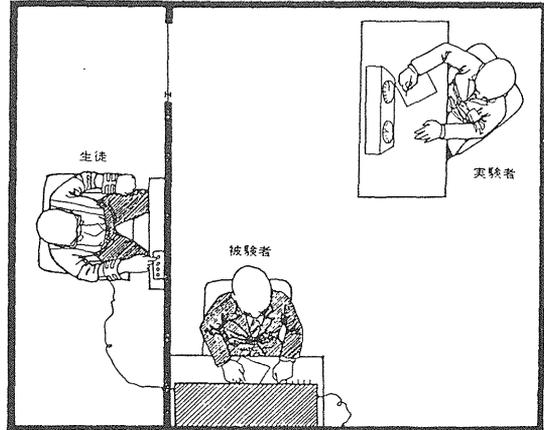


1961年

資料14 配布プリント「アイヒマン実験」

アイヒマン実験

—合法的権威によって他人に危害を加えるように命令された時、人はどう振る舞うか—



- 被験者 体罰の効果を調べる実験のために、教師役になって生徒に体罰を与えるように指示されている。
- 生徒 教師の質問に答えられない時に電気ショックの体罰を受ける。(ただし、実際は隣の部屋での声の演技を行なう。)
- 実験者 白衣を着た大学の研究者で、実験を見ながら教師が生徒に体罰を与えるのをためらうと、与えるように指示する。

レバー・ショック水準	電圧表示 (V)	男性 (40名)	女性 (40名)
1 微かなショック	15		
2	30		
3	45		
4	60		
5 中程度のショック	75		
6 (不満の声!)	90		
7	105		
8 (うめき声!)	120		
9 強いショック	135		
10 (絶叫! お願いだ	150		4名
11 からここから出	165		1名
12 してくれ)	180		2名
13 非常に強い	195		
14 ショック	210		1名
15	225		
16	240		
17 激しいショック	255		
18 (苦悶の	270		2名
19 金切り声!)	285		
20 (絶望的叫び!)	300	5名	1名
21 極めて激しい	315	4名	2名
22 ショック	330	2名	1名
23 (もはや声も出ず)	345	1名	
24	360	1名	
25 危険・	375	1名	
26 すごいショック	390		
27	405		
28	420		
29 ×××××××	435		
30	450	26名	26名

生涯、私は服従に慣れていました。
盲目的なまでの服従、
私が親衛隊にいた間中、それはずっとでした。
でも私が服従しなかったなら、
どうなったでしょうか？

死刑を前にしたアイヒマンの告白



ナチスのユダヤ人虐殺は、
数千人の人たちが、
服従の名において遂行した
忌まわしむべき背徳行為の
最も極端な例である。
しかし、それほどひどくなくても
この種の行為は絶えず繰り返されている。
普通の市民が他の人間を殺すよう
命令されて従うのは、
命令されていることが
義務であると思っているからである。
従って、権威の服従は、
長い間美德として賞賛されてきたが、
邪悪な目的のために
使われるとするならば、
見直されなければならない。
それは美德どころか、
憎むべき罪となった。
でないとすれば、何であろうか？

スタンレー・ミルグラム

(註) 人数は、参加者が最終的にどのレバーまで引いて実験を終了したか、を表す。

ドイツ人少女が見たナチズム

インゲ・シヨル著『白バラは散らず』未来社
 (著者はナチス抵抗運動で処刑されたシヨル兄妹の姉)

ある朝のこと、私は学校の階段で、同級生の一人がはかの女の子たちに「とうとうヒトラーが政権をとったのよ」と言うのをききました。そしてラジオもどの新聞も、「今やドイツ国内万般向上するの秋、オールを掌握したヒトラー」と報道しておりました。

生まれてはじめて、政治が私たちの生活にとびこんだのです。ハンスは当時十五歳、ゾフィーは十二歳でした。私たちの耳には、祖国についてさまざまなことが聞こえてきました。同胞とか、民族共同体とか、郷土愛とか。それは私たちを感服させ、私たちはそのことが学校や街頭で語られるのを耳にするたびに、感激して聞きはれました。だって私たちは、郷土をとて愛していたのです。森や川や、また果樹園とブドウ山のあいだを急な傾斜にそってうねうねとはしる年ふりた灰色の石垣。私たちは郷土という、もうすく、昔や、しめっぽい地面には親しいなつかしいところでした。祖国、それはことばを同じくし同じ民族に属するすべての人の、拡張された郷土ではなかったでしょうか。ですから私たちは、なぜということなしに國を愛しておりました。もちろんそれまでは、こんなことをあげつらうということはありませんでした。けれど今、今こそ空たかく、大きく輝く文字で祖国とするされたのです。そしてヒトラーが——いたるところで私たちの聞いたことは——ヒトラーがこの祖国を偉大・幸福・繁栄へもたらすべく努力する。彼は各人が仕事とパンを得るべく心を悩ませて、ドイツ人一人一人がその祖国にあって一個の独立・自由・幸福な人間となるまでは休み染しむことがない、というのです。私たちはこれはよいことだと認め、私たちとしてもよろこんで協力しようと思いました。だが、さらにある別なことがこれに加わり、私たちを言いやうもない力でひきつけ、ひきさらったのです。すなわち、腕をくみ隊伍をととのえて行進する青少年の姿、そのひるがえる旗や、前方を直視するまなざし、太鼓のひびきと歌声。これこそは、何か圧倒的なものではなかったでしょうか、この共同体こそは？ それゆえ、私たちみんな、ハンスもゾフィーもその他みんながヒトラー青年団に加入したことは、不思議なことでもなんでもありません。

私たちは身も心も奪われていたのです。それで、父が承諾をあたえるときいっこうに喜びもせず誇りにもしないのを見て、首をかしげました。それどころか、父はこの件についてはとても不機嫌で、ときどきこう申しました。「やつらを信用するなよ、子熊を追う狼だぞ、やつらはドイツ民族の鼻づらをひきまわすのだ」。また彼はしばしばヒトラーを、笛で子どもたちを誘惑したというハーメルンのねずみとりに、比べました。しかし父親のことばは風に吹きはらわれ、子どもたちをひきもどそうとする彼の試みは、私たちの若気な感激のために失敗したのです。

私たちはヒトラー青年団の仲間とともにキャンプに出かけ、新しく発見した郷土、シュヴァーベン・アルプスを、縦横無尽に歩きまわりました。

私たちは幾時間も息をきらせて歩きましたが、へこたれることはありませんでした。感激がよくて、疲れたと白状する気もしなかったのです。若い人たちが突然にか共通な結合感を感じ分ちあひ、ふだんにはめつたにないほど隔てがとれることは、すばらしいことではないでしょうか？ 夕暮れに私たちはキャンプにつどい、朗読や合唱をしたり、また余興や作業もしました。われわれは一つの偉大なことに献身すべきである、という講話もありました。私たちは真面目に相手にされたのです。心をおどろかさすような期待のされかたでした。そしてそのことが、私たちを特別におだてあげたのです。われわれは一つの大きな組織だった有機体の一員であり、それは十歳の少年から成年者にいたるまで全員をつつみ、各人に所をあたえている、という気がひしひしとしました。自分が一つの過程、大衆から民族を作り出す一つの運動にあずかっているのだ、と感じられました。私たちの気持ちをすさまじく、趣味をあさくするようなことが、多少はともなうのもしかたあるまい——とそう思っていました。

あるとき十五歳の少女団員がテントのなかで、長い自転車旅行ののちにみんな広い星空の下でのびのびと身をよこたえていたとき、かなり唐突でしたがこう言ったのです。「何もかもすばらしいんだけど——ただユダヤ人のことが気になってしかたがないわ」。隊長をしていた娘の答えは、ヒトラーは自分のすることをちゃんとわかまえていて、だからみんな重大事のためには、気になることや、わからないことをのみこむのが当然だ、というのです。しかし少女のほうはこの返答になかなか満足せず、それに和する娘たちもいました。家庭で両親たちのうれえていることが、突然こんな形で娘たちの口から出たわけです。その夜は、テントの中は荒模様となりました——だが結局、私たちは疲れきっていました。そしてあくる日は、言いやうもなく晴れて充実した一日でした。前夜の会話はさしあたり忘れられてしまったのです。

私たちの隊はみんな団結していて、隊員はたがい友愛関係にあるようでした。同志関係は何かしら美しいことと思われました。



ヒトラー・ユーゲントの少年たち。当時はまだ、全員が制服を着ていたわけではなかった。1933年

服従を求める人間の心理 (エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』東京創元社より)

サディズムは、多くの観察者にとっては、マゾヒズムよりは謎のすくないものである。ひとをきずつけ、ひとを支配しようとするのは、けっして「よい」ことではなくても、きわめて自然であるように思われるから。ホップスは「死のほかにはとどめることのできない、権力から権力を追求するたえまない願望」の存在を、「全人類にみられる一般的な傾向」と考えた。かれにとって権力をもとめる願望は、悪魔的なものではなく、快楽と安全をもとめる人間の願望の、まったく合理的な結果にほかならない。ホップスからヒットラーにいたるまで、支配の願望を、生物的に条件づけられた適者生存のための闘争の論理的結果と説明するものにとっては、権力への渴望は、なんの説明も必要としないほどあきらかな人間性の一部であると考えられている。しかしマゾヒズム的な努力、すなわち自己自身に反対する傾向は、謎のように思われる。ひとびとが自分を小さくし、弱くし、きずつけるだけではなく、それを享樂しさえする事実を、どう理解したらよいのであろうか。マゾヒズムの現象は、人間の心理は快楽と自己保持にむけられているという、われわれのすべての考えに矛盾するものではないだろうか。一部のひとびとが、われわれが避けたいと思うもの、すなわち苦痛や苦悩に惹きつけられ、それをうけいれようとしていることは、どう説明できるだろうか。

その答えの方向は、すでにこの章の初めに暗示されている。マゾヒズムのおよびサディズムの努力のいづれもが、たえがたい孤独感と無力感とから個人を逃れさせようとするものである。マゾヒズムの人間を精神的分析的に、また経験的に観察すると、多くの事例によって、かれらが孤独感と無力感の恐怖にみちていることがあきらかになる(それをくわしくのべることは、本書の範囲をこえるのでできないが)。しばしばこの感情は意識的ではなく、それは優越性や完全性の、捕獲的な感情でおおわれていることもある。しかしこのような人間の無意識的な心の動きを奥深くさぐりさえすると、必ずこの感情がみいだされるであろう。個人は否定的な意味で自由であると感ずる。すなわちかれはひとりぼっちであり、よそよそしい敵意にみちた世界に対立している。この状況のなかでは、ドストイェフスキーの『カラマゾフの兄弟』のなかのすぐれた叙述をひくならば、「人間という哀れな動物は、もって生まれた自由の賜物を、できるだけ早く、ゆずり渡せる相手を見つけたという、強い願いだけしかもっていない」。おびえた個人は、自分をだれかと、あるいはなにかと結びつけようとする。もはやかれは自分自身をもちきれない。かれは狂気のように自分自身から逃れようとする。そしてこの重荷としての、自己をとりのぞくことによって、再び安定感をえようとする。

マゾヒズムはこの目標への一つの方法である。マゾヒズムの努力のさまざまな形は、けっさく一つのことをねらっている。個人的自己からのがれること、自分自身を失うこと、いいかえれば、自由の重荷からのがれることである。このねらいは、個人が圧倒的に強いと感じる人物や力に服従しようとするマゾヒズムの努力のうちにはっきりあらわれる。

ある条件のもとでは、このマゾヒズム的追求は相対的に成功する。もし個人がこのようなマゾヒズムの努力を満足させる文化的な型をみつけることができれば(たとえばファシストのイデオロギーにおける「指導者」への服従のように)、かれはこの感情をともにする数百万のひとびとと結びついているように感じて、安定感をうるのである。

個人的自我を絶滅させ、たえがたい孤独感にうちかとうとする試みは、マゾヒズムの努力の一面にすぎない。もう一つの面は、自己の外部の、いっそう大きな、いっそう力強い全体の部分となり、そ

れに没入し、参加しようとする試みである。その力は個人でも、制度でも、神でも、国家でも、良心でも、あるいは肉体的強制でも、なんでもよい。ゆるぎなく強力で、永遠的で、魅惑的であるように感じられる力の部分となることによって、ひとはその力と栄光にあやかるうとする。ひとは自己自身を屈服させ、そのものつすすべての力や誇りを投げ捨て、個人としての統一性を失い、自由をうちずてる。しかしかれは、かれが没入した力に参加することによって、新しい安全と新しい誇りとを獲得する。またかれは疑惑という責苦に抵抗する安全性も獲得する。マゾヒズムの人間は、外部の権威であるうと、内面化された良心あるいは心理的強制であろうと、ともかくそれらを主人とすることにうって、決断することから解放される。すなわち自分の運命に最後の責任をもつということから、どのような決定をなすべきかという疑惑から解放される。かれはまたかれの生活の意味がなんであり、かれがなにものであるかという疑惑からも解放される。このような問題は、かれが結びついている力との関係によって答えられる。かれの生活の意味やかれの自我の同一性は、自身が屈服したより大きな全体によって決定されるのである。

他人にたいして完全な支配者とならうとするサディズムは、マゾヒズムの傾向とはまったく反対のように思われる。それでこの二つの傾向が密接にくみあわされたものであるといえ、ひとは当惑することもわからない。もちろんその実際の結果について考えれば、依存し苦しもうとする願望と、他人を支配し苦しめようとする願望とが、正反対のものであることは疑いない。しかし心理学的には、この二つの傾向は一つの根本的な要求のあらわれである。すなわち孤独にたえられないことと、自己自身の弱点とから逃れれることである。私はサディズムとマゾヒズムのどちらの根底にもみられるこの目的を、共棲(symbiosis)と呼ぶことにしたい。心理学的意味における共棲とは、自己を他人と(あるいはかれの外側のどのような力とでも)、おたがいに自己自身の統一性を失い、おたがいに完全に依存しあうように、一体化することを意味する。

サド・マゾヒズムの衝動が支配的であるような人間の性格を、サド・マゾヒズム的特徴づけることができるであろうが、そのような人間は必ずしも神経症的であるわけではない。ある特種の性格構造が「神経症」的であるか、あるいは「正常的」であるかは、だいたいのところ、かれらが置かれている社会的状況のなかで果さなければならぬ仕事や、かれらの文化において現存している感情や行動の型によって、左右されるものである。事実、ドイツやその他ヨーロッパ諸国の、下層中産階級の大部分には、このサド・マゾヒズムの性格が典型的にみられる。のちにくわしく示すであろうが、ナチのイデオロギーがもつとも強く訴えたのは、まさしくこの種の性格構造であった。この「サド・マゾヒズム的」という言葉は、倒錯と神経症という観念と結びついているから、ことに神経症ではないくて正常な人間をさすばあいに、私はサド・マゾヒズムの性格という言葉を使うかわりに、「権威主義的性格」と呼ぶことにしたい。この用語の使いかたは、サド・マゾヒズムの人間の特徴は、権威にたいする態度にあらわれるものであるから、正当であると考えられる。かれは権威をたたえ、それに服従しようとする。しかし同時にかれはみずから権威であろうと願ひ、他のものを服従させたいと願っている。さらにこの言葉を使うもう一つの理由がある。ファシズム的組織は、権威が社会的政治的構造において支配的な役割を果たしているという理由で、みずから権威主義的とよんでいる。それで「権威主義的性格」という言葉で、ファシズムの人間の間の基礎となるようなパースナリティの構造を代表させたいと考えるのである。

オウム からの 帰還

高橋英利
Takahashi Hiroshi

高橋英利 (たかはし・ひろし)

1967年、東京都立川市生まれ。信州大学理学部地質学学科および大学院で測地天文学を専攻。野辺山天文台、水沢天文台での研究を中断して94年5月にオウム真理教に出家。教団の科学技術省で故・村井秀夫の直風の部下となる。出家直後より教団に疑念をもっていたが、強制捜査を機に自ら上九一色村のサティアンを脱出、教団を脱会した。

グルイズムの陥穽

オウム事件を振り返ってみてあらためて痛感するのは、人間が集団化し組織化することによって引き起こされる暴力が、いかに惨たらしいものであるかということだ。集団化は人間の理性を眠らせ、心の奥底にひそむ闇の深さを浮き彫りにしてしまう可能性をもっている。しかもそれが、本来暴力を否定しているはずの宗教の名のもとで、実際におこなわれてしまったのだ。正直言つて僕は戸惑いを隠しきれない。

修行によって自己を高め、集団となつてすべての人びとの救済を目指す。そのための宗教という看板が掲げられた入口をくぐつたはずが、出口には凶悪なテロリスト集団という看板が掲げられてオウムとはまさにそのような「装置」だった。いったいそこでは何がおこなわれていたのか。

入口で人びとを魅きつけた自己の変革と理想世界への移行という方向性を、オウムはその「修行」というシステムのなかで巧妙にすり替えていたように思えてならないのだ。

個人の修行が始まるオウムのシステムは、やがて教団のための奉仕活動に移行していき、「ワーク」という名の課題が与えられるようになっていく。これは、「あなたの特性に合わせて、グルが個人的に与えるものだ」との説明がなされる。グルが自分のことを見ていく。信者はこれに感激し、グルによって見守られているという安堵感を得、与えられたワークに没頭するのである。

こうして弟子とグルとの関係が始まる。その延長線上にすべてが展開するのである。グルは最初、きわめて優しく接しつつ、少しずつ高度な課題を与えていく。それをこなせない弟子は、その時点で相手にされなくなる。だから弟子は必死になつて課題をこなす、グルに少しでも近づこうとする。グルは、はい上がつてくる弟子に対してより困難な課題を与えていく。

同時に弟子に対して厳しく接するようになる。課題をこなせない弟子を多くの面前で罵倒したりもする。精神的にも弟子を追い詰めていくのである。だが困難であればあるほど、弟子はそれがグルの慈愛であると解釈して、よりいっそう努力するのだ。そして困難な課題を達成したとき、はじめてグルは微笑みながら祝福するのである。これが「成就」「解脱」という言葉で飾られていく。

弟子はより困難な課題を与えられることを受け入れるようになっていく。そこでグルに対して疑念を抱く余地などない。疑念をもつたその瞬間にグルから見捨てられてしまうからである。

こうして、グルの意思を完全に受け入れ、実行する弟子だけが残っていく。これがグルへの絶対帰依である。オウムでは「一〇〇パーセントの布施」「肉体のすべてを布施する」あるいは「自己を空

っぽの器にし、そこにグルの意思を満たす」という表現がなされていた。これが実践できるものだけを、麻原さんは自分の身近においていたのである。

チベットではたしかにグルへの強力な帰依を説く「グルイズム」というものが修行形態として存在しているという。それ自体を考察するだけの資格は僕にはない。ただ言えるのは、「オウム真理教」におけるグルイズムというものの問題点である。

思い出していただきたい。一連の事件の実行犯とされる人たちのほとんどが、麻原さんの身近にいた幹部ばかりである。麻原さんは彼らを選んで「殺人」という理不尽きわまりない課題を与えたのだ。なぜ彼らだったのか。グルへの帰依ができていたからだ。どんな理不尽なことであっても、その秘密をけつして他に漏らすことなく実行できる弟子たち。そんな彼らを麻原さんは慎重に選んだのだと思う。これもまた「修行」だと言う人がいるかもしれない。だが僕はそうは思わない。麻原さんは彼らを利用してただけだったのではないのか。何に？ 麻原さん自身の欲望の実現のためである。

ここに大きなすり替え、欺きがある。グルが弟子に困難な課題を与え追い詰めていくのは、弟子を解脱へと救済へと導くためだったはずである。だからこそ弟子はすべてを棄ててグルに帰依するのである。グルと弟子とは、ひとつの「契約」をかわしているはずではないのか。

だが、ここで僕は問いたい。サリンを撒くことの、どこが救済なのか。大量無差別殺人にどんな意味があるというのか。そのことによってグルは弟子をどこへ導いたというのか。

はじめから殺人を肯定する教団と知つてオウム真理教に入信した信者は、おそらく一人もいなかったはずだ。実行犯とされる人たちもみな、自己の変革、他者の救済、理想世界への移行、そうしたイメージを持ってオウムの門をくぐつたはずである。その先に待ち受けていたものを、彼らは想像すらできなかったにちがいない。

しかしながら、実際には「救済」という言葉を唱えつつ彼らはサリンを撒いたと聞く。ここに集団化するこの恐ろしさがあると思う。グルへの絶対帰依ばかりではなく、オウムの集団としての強力な圧力、集団化が生み出す抑えきれない力というものも、この一連の事件には働いていると思う。

オウムのもうひとつのキーワードとして「ハルマゲドン」つまり最終戦争の危機感がある。オウムはこれを半ば強迫観念的に説きつづけるのだが、先に触れたように地球規模での危機状況の進行は、すでに多くの人びとの心に迫っている問題でもある。われわれの元に届く情報はどれを見ても、もはや避けることのできない悲惨な近未来の姿しか伝えておらず、ひるがえつて物質文明に埋没しきつた非力でしかない自分の姿に気づかされるのである。

そこにオウムが終末からの救済、あるいは終末後の新世界を説きながら登場するのである。終末という漠然とした不安感、個人においては遠い先の物語としか思えないが、それが集団のなかで語られるや、差し迫つた事態としてのリアリティを帯びはじめ。僕はオウムのなかで「救済のためだから仕方がない」「ハルマゲドンだから仕方がない」という言葉を幾度も耳にしたのである。こうした論理がオウムという集団のなかで増幅されていき、やがて臨界点を越えたところで、理不尽で破壊的な行動へと突っ走つてしまつたのではないのか。そこには理性的な判断というものが存在する余地など残されていなかったのではないだろうか。それを思うとき僕は心底、恐怖を覚える。

オウムという怪物……もちろん僕にはまだそのほんの一部しか見えていない。だが、いまの僕はこれ以上冷静に分析を進められる状態にはない。

オウムが実際に破壊したものを思い起こすたびに僕は言葉を失ってしまうのである……。